

目 次

聖訓摘要	本多日生
開目鈔講話(承前)	小林一郎
歡喜奉行	小西日喜郎
立正安國の春	井上清純
難局に直面して信念に生きよ	岩野直英
搖ぎ無き心	小林一郎
宣撫班從軍より歸りて	中山正男
時代對應の教化	磯部滿事
記事	
○本部團報	
○團費誌料寄附金及維持費領收	

第十四五年二月號



統

法財人團
統

一團發行

財團 統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サザル所ナリ

ヲ有スル名譽アル正定業ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ 第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、毅然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ 教旨ノ正明 研學ノ淵達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ 定ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團 畧 則

- 目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ闡明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- 維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- 贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- 正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方ヲ正團員トス
- 入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- 誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

聖訓摘要

本多日生

十八圓滿鈔

總じて予が弟子等は我が如く正理を修行し給へ、智者學匠の身と爲りても地獄に墮ちて何の詮かあるべき。(縮刷遺文錄) 二〇〇九

日蓮が弟子信者は、日蓮の言ふ通りに間違へぬやうに正しくやつて行かなければならぬ、學問でも信心でも正理を修行しなければならぬ、正の裏は邪である、理の裏は非である、邪を誡め非を誡めて、正を尊び理を尊ぶ所の日蓮主義。この正しい意味合を忘れぬやうにしなければならぬ、唯だ物知りになつても地獄に墮ちては何にもならぬぢやないか、信心々々と言つて暇を費しても、それが間違つて居つては何にもならぬぢやないか。だからドンドコ法華といふやうなものは一番に反省しなければならぬ、ドンドコといふやうな事が第一いかにぬのである、何處までも正を尊び邪を誡め、理を尊び非を誡むるといふ、この日蓮主義の嚴肅なる信仰といふものを考へなければならぬ。日蓮主義が多數を頼んで墮落する

といふことは、日蓮聖人の思召に最も反對しか所の態度である、終ひには全世界を統一するにもせよ、正しい者を以つて組み立て、行くのが日蓮主義であるから、説を曲げてさうして多くの者を併合するといふやうなドンドコ法華の態度は、大いに間違つた事と言はなければならぬ。この點は今の言葉が最も宜しいと思ふ、「智者學匠の身と爲りても地獄に墮ちて何の詮か有るべき」と言はれたが、他の言葉を以つて言へば、幾ら多數を以つてワイ〜と賑やかさうにやつても、それが間違ひであつた時には何の役にも立たないのであるから、何處までも正理を尊ぶやうに日蓮主義は心得て行かなければならぬ。

日嚴尼御前御返事

四條金吾許御文

智妙房御返事

上野殿御返事

この中には孰れも別段に引く所がありません。

諫曉八幡鈔

一分の驗ある様なりとも、天地の知る程の祈りとは成るべからず、魔王魔民等守護を加へて法に驗の有る様なりとも、終には其の身も檀那も安穩なるべからず、譬へば舊醫の藥に毒を雜へてさしを

けるを、舊醫の弟子等或は盗み取り、或は自然に取りて人の病を治せんが如し、いかてか安穩なるべき(繪圖遺文錄 二〇三三)

これは加持や祈禱みたやうな事に依つて一分の驗はあつても、「天地の知る程な祈」と言つて本當の國家の安泰を祈るとかいふ大事な事は利かない、個人の病氣が癒つたとか、狐が落ちたとかいふやうな事はあるけれども、これは正しい者の方から來るのでなくして、魔王、魔民等が守護を加へて、一時驗のあるやうに見えるけれども、終ひには祈禱者も祈禱を受ける者も安穩ならずして、却つて人生の間違ひを起して終るものである。恰も舊い醫者が藥だと言つて毒を留めて置いたのを、その弟子等が知らずして用ひるやうなもので、非常に世の中を害するものぢやといふ事をお書きになつた。これは大本教などに就いて考へても、今になつたら判るでせう、あれなども鎮魂歸神ナンと言つて、ちよつと何か出て來て御利益があつたやうに見えるけれども、そんな事を言つて居る内にその身も檀那も安穩ならずで、本人も懲役に行くやうなことになる、建物は官の手に依つて之れをブチ壊され、信者は家屋敷を失うて妻子が路頭に迷ふやうなことになる。であるから加持祈禱といふやうなものは、餘程慎まなければならぬ、宗教は祈る所なければ信仰が衰へるといふから、祈るのは宜いけれども、唯だ加持祈禱みたやうな事はかりやつて居つたら、眞言でも日蓮宗でも大本教でも天理教でも同じやうに迷信の弊害に陥つてしまふ、茲に在る通り一分の驗はあるやうでも、それは魔王が企を加へて居るのであるが故に、遂には必

ずやその弊害に陥るものである。この事は詳しくは首楞嚴經といふお經にお釋迦様が詳しくお説きになつて居る。私は大本教の事などに就いても、あれは何も思想問題といふやうな大きなものではない、迷信的宗教としても頗る不完全なものであるから、終ひには法律の手に依つて處分を受けて滅るのが落ちだといふことをその當時言ふて置いた、所が大本教の方で出して居つた大正日々新聞に、日蓮門下は法難迫害といふことを知つて居るべき筈である、吾々が法律で處分されるといふことはこれは法難である、それを法律に依つて結末を告げるなどといふ事を言ふのは、日蓮門下に似合はぬ馬鹿坊主だといふやうな事を書いて居つた、馬鹿坊主か何か知らんけれども、やはり法律に依つて彼が結末を告げるといふことは、私は首楞嚴經に依つて判断し、日蓮聖人の正義に依つて、『遂にはその身も檀那も安穩なるべからず』といふこの聖訓に基いて私は斷定をしたのである。彼等のやうにお筆先とかいろ／＼と出て來たといふやうな事から言つたのではない。果せる哉私のいふ通り大した思想問題といふ程の大きな問題でも何でも無い、蓋をあけて見れば詰らぬものである、やはり法律の制裁に依つて彼れ王仁三郎は懲役といふことである、今控訴をして居るけれども、何遍控訴してもあれは結局罪は免がれないものである。彼のいふ豫言よりは私の判断の方が能く當る、向ふの方は外れるけれども此方は外れはせぬ。そこでこれは大本教だけではない、法華宗でも眞言でも今後さういふ事をやつて居れば、必ずやその弊害に堪えなくなる、これは宗教に附隨する所の一番嫌なことである。宗教は大事な事である、或る意

味に於いて神祕的の所もある、知識の解釋のつかぬやうな崇かな事があるから、それを以つて人を蠢惑するといふやうなことは非常な悪い事である、宗教をやる者は最も嚴正を尊んで、信仰が人の智力を超越して迷信に陥つて居るといふやうな場合には、極力注意しなければならぬ。況してや日蓮主義を奉戴する者からして、眞言や大本教の向ふを張つて、モウ一つ上に行くといふやうな態度を執るといふことは、實に日蓮聖人に對する罪人である。その點を今日まで法華宗の人が反省しない者が非常に多いけれども、これは洵に間違つた態度である。私は顯本法華宗を支配して居りますから、私が管長になつてから、さういふ事をして居る坊主は皆放逐してしまひました。一體日蓮主義者は各派ともその廓清をやらなければ駄目である、表面にいくら理窟をいつた所で、内部で迷信を鼓吹して居つて、どうして日蓮主義の正義が發揚されますか、彼等は皆嘘偽である、本當のものではありませぬ。さうして私が斯く言へば、『あれは強い事ばかりいふから駄目だ、不都合な奴だ』といふ、どちらが不都合であるか、今頃日蓮主義のこの間違つた所を廓清するといふ決心がつかぬやうな者が、社會人心を指導するなどといふことは烏餅がましい話である。他の事は兎に角、この教の精神だけは曲つてはならぬ。それはその時／＼に酒を飲んだとか、少々嘘を吐いたといふ位の、個人的の少しの罪は赦すとしても、教から曲げてかゝるといふことは怪しからぬ事である。

今日蓮は去ぬる建長五年癸丑四月二十八日より、今年弘安三年太歲庚辰十二月に至るまで二十八年

が問、又佗事なし。只だ妙法蓮華經の七字五字を日本國の一切衆生の口に入れんと願むばかりなり、此れ即ち母の赤子の口に入れんと願む慈悲なり。(繪圖遺文錄 二〇三四)

これは洵に優しい御教訓でありまして、日蓮が始めて建設五年の四月二十八日に旭ヶ森に於て題目を唱へ始めた時、それから今この御書を書かれた弘安三年の十二月に至る迄二十八年の間(この後二年を経て弘安五年の十月に御遷化になつたのであります)、この御書を書かれた場合は前後二十八年である、その二十八年の日蓮の活動といふものは何も他は無い。唯だこの南無妙法蓮華經を通して日本國の人を救はんとする所の慈悲は、丁度母親が赤ん坊に乳を吞まそうとする、赤ん坊は口をつぶつて乳を吞まない、乳を吞まなければ瘡を衰へて死んでしまふ、どうぞこの乳を吞んで呉れと、母が泣きの涙を以つて乳首を赤ん坊の口に寄せて、涙と共に『そんなに泣いてばかり居ないで之れを吞みなさい』と言つて居る、その母親の気分は、日蓮の法華經宣傳の気分と同じものであるといふ事を言はれた、如何にも日蓮聖人の優しい意味が『母の赤子の口に乳を入れんと願む慈悲なり』といふ一言に能く現はれて居ると思ひます。

涅槃經に云く、一切衆生異の苦を受けるは悉く是れ如來一人の苦なり等云云。日蓮云く、一切衆生の

一切の苦を受けるは悉く是れ日蓮一人の苦と申すべし。(繪圖遺文錄 二〇三三)

この涅槃經の文は、大迦葉菩薩が釋迦様の有難い事を褒められた讚佛偈であつて、釋迦如來は、一切衆生が様々なる苦みを受けて居る、或る者は貧の苦に居る、或る者は名譽の得難きに苦んで居る、或る者は男女の慾望の爲に泣いて居る、いろ／＼の事に依つて人生は苦みに居るが、如來は如何なる愚な事から苦んで居るにもせよ、その原因の何たるを問はない、苦そのものを憐れと思ふのであるから、丁度母親が、子供の泣いて居るのは犬に驚いて泣くのも、饅頭を落して泣くのも、泥溝に陥つて泣くのも、その原因は問はない、子供は詰らない事で泣いて居る、饅頭を落した、こつちに未だ幾個もあるから之れをやると言つても、子供は落した饅頭を見て泣いて居る、犬がワン／＼と吠へれば別に嘔つかなくとも直き泣き出す、けれどもそれに對して母親は『ア、可哀さうだ』と思ふが如く、凡夫はいろ／＼意味なき事に依つて苦むけれども、而も如來はその人々の意味なき苦みに對しても、同情を以つて之れを憐れ給ふのである。一切衆生の異なる様々なる苦みを受ける、それを自分一人の苦みのやうに、考へて、一切衆生の苦みを一人で背負つて、佛は御心配下さつて居るのであるといふも經文である。この迦葉の讚佛偈を引いて日蓮聖人が、日蓮も佛様の思召のやうに、一切衆生は一切の苦みを受けるのは日蓮一人の苦みのやうな気分がするといふ事を仰せられた。實に日蓮聖人の親切が厚い事を茲に現はし給ふたのであつて、宗教の尊いのは、その信する本佛釋尊の慈悲に感激して、その感激の精神が流れて、一方には佛様の慈悲に絶り、『ア、有難い』と思つて慈悲に感激した、その感激が今度は自分より下に對いて、親切の精神となつて現はれて來るのである、上に佛に絶り、下に衆生を導き、他を救ふ所の精

神に現はれて、ズツとその感激の精神が珠數繋りになつて行くのである。さうしてこの救ひの手に絶つた人は、又喜んで他を救ふといふやうに、慈悲と感激、感激と他に對する救済といふものがズツと繋つて行けば宜いのである。その反對に社會が壞はれる方から言へば、不親切な精神と反抗の精神であつて向ふが無慈悲であるからこつちもそれに反抗する、無慈悲と反抗といふもので石を打つけ合ふといふことになつて、人類の幸福といふものは全滅するのである。現在の文明といふものは實に憐れな途を辿つて居るものであると思ふ。この勢で進んで行つたならば、嘗に露西亞のみが悲惨な状態に陥つて居るばかりでなくして、世界を擧げて露西亞のやうな事にならぬとはいへない。どつちに傾くかといへば、今の状態ではどうも危険い方に行きたがるのではないか、支那の前途を見、伊太利の前途を見、獨逸の前途を見て行くと、一方には健全な者もあるやうであるけれども、一つ間違つたならば必ずや勃發するに違ひない、丁度火山の上に家を建て居るやうな状態である。日蓮も下手をやるとさういふ事に成らんとは言へない、日本だけは違ふやうにも思ふけれども、併し放して置いたならば随分極端な者が出て来て、何の意味か判らぬけれども、随分不健全な思想も一面には流れて居るやうに思はれる。この際は國を思ふ上からも、日蓮主義に感激したる精神からも、各々分に應じて慈悲の精神を養つて、この優しい感じを世の中に蔓らして、無慈悲の精神と反抗破壊の精神とをこの世の中から消えるやうに努力して行かなければならぬと思ふのであります。それにはお釋迦様の有難い事を感激する所のこの精神が、一面には慈悲を喚び起して行く、上に感激し下に慈悲を垂れて行くといふ、これがズツと續いてお互に一面の信仰が直ちに世を救ふ光に現はれるやうに致したいと考へるのであります。

開目鈔講話

(承前)

小林一郎

又云、秘密主、彼是の如く無我を捨て、心主自在にして自心の本不生を覺る等云云。

「無我を捨て」といふことは難かしいことでありませう。

我

無我

一如

一番初めの「我」といふのはこれは凡夫でありませう。俺がと言ふ。これはマア信心などしない者は我

ばかり考へて居る、自分が儲ければ宜い、人は損してもかまはない、自分が美味い物を食へば人はどうでも宜い、自分と他人と向ひ合せて、他の者はどうでもかまはない。他の奴は突き飛ばしても自分さへ宜ければよいといふのが我であります。それは全く信仰もなければ倫理道德も辨へない者はそれでありませう。

それから一段進んだものが「無我」であります。自分はどうでも宜いと斯うなる。自分はどんなに苦しくても、他の人を救うてやらう。自分は後へ退つても他の人を先に立たせてやらうといふ。それが無

我であります。これは餘程善いでせう。

けれどもそれよりモツと進んだら、自分も他人も兩方宜くなければならぬと思ふ、それが「一如」であります。それが一番善い、それは出来るだけその方が宜い。譬へば親が子供を可愛がるといふことはさうであります。親は自分はどうでもよいと言ふけれども、どうでもよくない。親が子供を可愛がる時に子供が幸福だといふと親も一緒に嬉しがる、だから一如であります。チョット他から見ると自分を捨てて居るやうに見えるけれども、さうではない。饅頭を二つに割つて子供に半分やつて、又その残りの半分を子供にやつてお母さんは少しも食べない、子供に皆やつて居る。無我らしい、けれども能く見るとさうではない、子供が嬉しがつて食べて居るのをお母さんは喜んで居るのであります、やはり我を捨て、居りはしない。それが一如であります。自分を捨てたと思ふのはまだ假である、本當を言へば自分

を捨てたことが自分の喜びでありますから、それは本當に捨てたのではない、一如したので、さうならなければいけない。だから己を犠牲にするとか、献身的といふのは、自分で言ふべきことではない。他から見ると、「ア、あの人は献身的だ」と言ふけれども、自分はそれを喜んで居る。結局一如になる。自分で献身的だナンと吹聴するのは怪しい。俺は献身的にやつたナンと言ふが、ナニモ献身的でありはしない。本當に献身的なら、他から見れば苦しからうと思ふけれども、當人は満足してこれで宜いと喜んで居る。それであつて一如する、一緒になる。これで行つて見ると、案外高い物を賣りつけられたりすることがある、世間の奉仕的は當てにならないのであります。吹聴は當てにならない。本當は無我を捨て、しまふ、他から見るとつまらないやうに見えるけれども、自分では満足して居る。他の人の喜びは自

分の喜びだ、斯うなつて行くのです。だから日蓮上人の如きは、他から見れば苦しい生活だけれども、

日本國に於て第一に富める者は日蓮なるべし

自分ほど幸福な者はない、斯ういふやうに言はれて居る。そこに至らなければ、本當に有ゆる困難を凌いで行くといふことは出来ない。苦しいけれども我慢してやつて行くといふのでは、それは或る程度まで行けるけれども、その度が超えれば投出したくなる。他から見れば苦しいやうだけれども、自分は満足することが出来るのでありますから、そこで本當に自分の信仰を貫いて行くことが出来る譯であります。

さういふやうに無我を捨てる、マア自分を捨て、しまふ程度ではまだ真ものではない。無我を捨て、しまふ。「心主自在」心のはたらきが自由自在に出来る、自在といへば順境であつても逆境であつても、どんな所に居つても宜しきに叶ふやうな行ひが

出来る。それが心主自在、心の中心のはたらきが自由にはたらいて行く。これは本當に覺つた人はさうでありませう。金があればあるで平気で居る、なければないで平気で居る、心主自在であります。そんなに拗れるには及ばない。あまり金ばかり欲しがつて居る人に向つては、金などない方が宜いと言ふけれども、ない方が宜いことはない、やはりある方が宜いにしまつて居る。一文もなければ電車にも乗れない。併し又たある方が宜いからと言つて、ない時に愚痴をこぼしたり、ない時に人を突き飛ばして取らうとしては困る。心主自在でなければいけない。ある時はあるやうに、ない時はないやうに、皆が讚めても平気で居る、皆が悪く言つても驚かない。それが心主自在であります。さうなつて行けば本當でありませう。「自心の本不生を覺る」元來不生といふのは變化しないこと、生は生滅、隨て心の本當の性質といふものは變らない、働らきは變つて

行く、その働らきは、變らない自分の本心から出て行く。それが本不生であります。これは大日經の方では本不生といふことはやかましい。本不生といふことは變化しないこと、いろ／＼働らきは變つて現れるのであるけれども、心そのものの本當の性質といふものは佛様と相通ずるところの尊い性質で、これは變らないこれをしつかり捉まへて行く。さうすると周囲の氣分が少しばかり變化しても驚かない。これを言ふのであります。

又云、所謂空性は根境を離れ、相無く、境界なく、諸の戲論を越へて虚空に等同也、乃至極無自性等云云。

これも今申すと同じやうなことで、「空」といふことは、平等といふことで、變らないといふことであります。人間の本當に變らないところの性質といふものは、根境を離れる。根といふのは眼とか耳

にでも居られるといふこと、そこが大事なことであります。「諸の戲論を越へ」その境界に負けないぐらゐのことは誰でも言ふ。ナニニ金があつてもなくとも宜い、暑くても寒くても何でもないと言ふ。併し言ふだけでは駄目です、戲論です。境界に負けないといふことを口先だけではない、口先だけの戲論を離れて、實際心にそう思ふ。それが戲論を離れるといふことであります。吾々は戲論になり易い、金などは要らないと言ひながらやはりあるのが美しい、美味しい物は食ひたくないと言ひながら、ツイ食ひたくなつたりする、吾々のは戲論であります。口で幾ら言ふても仕方がない。金が要らないといふのは本當は金が欲しい、實際を言へば、本當に要らなければ黙つて居たら宜い。兎角さういふ人が世の中にある。「ナニニ金などはどうでも宜い、俺は社會に對して少しも野心が無い」と言ふ、野心がなければ黙つて居れば宜い、野心がないと言ふのはあるか

とか、鼻とか口とかといふやうな感覺のこと、五根とも言ひ六根とも言ふ、よく六根清淨と言ふのはこれでありませう。眼は根で、眼に見える色は境であります。耳が根で、耳に聽える聲が境であります。境は他から来る。だからその根と境を離れる、つまり差別を離れる、眼にいろ／＼な色が見える、耳にいろ／＼な聲が聽える、口にいろ／＼な味ひが判る、それが根境であります。根といふのは自分の感覺、境といふのはその感覺の起つて来る色、聲、味、さういふものに執はれない、それが根境を離れるといふことであります。だから美味しい物を食べて居ても平氣だ、不味い物を食べて居ても平氣だ、美しい物が来ても迷はされない、汚ない物が来てもこれを嫌はない。斯ういふやうに根境を離れる。「相無く境界なく」相無くといふのは差別の無いこと、境界なくといふのは、境界がないのぢやない、境界に執はれないこと、人間には境界がある、そのどんな境界

ら言ふのである。要するにそれは戲論です。世の中にさういふ事はよくあるのであります。

いつぞや私が或る所に行つて庭を見せて貰つた、さうしたら案内人が二人居る。出懸けにマア少しばかり心付けをやらうと思つて、二人で分けるだらうと思つて一人に包んでやつた。二人で分けると言へば宜かつたが、黙つてやつたら、「有難うございませう」と言つてその人が一人で取つてしまつた。するとモウ一人の人が「私にはどうぞ御心配なく……」と言ふ。「は、アこれだナ、世の中で金が要らないと言ふのは……」と私は思つた。欲しいから言ふ、御心配なくと言ふのは、心配して貰ひたいから言ふ。さうでなければ黙つて居れば宜い筈だと思つた。それが戲論であります。本當に戲論を離れなければいけない、口先だけでこれを議論しても始まらない。

さういふやうにどんな境界にも執はれないやうな

心持になりまして、さうして戲論を離れます。さうして「虚空に同等也」虚空と同じになる。虚空といふものは高い山の上も覆うて居るし、どんな谷底の上をも覆うて居る、綺麗なものでも穢いものでも虚空は覆うて居る。吾々がどんな境界に居つてもその境界を嫌はないで行く、虚空が總てのものを覆ふやうになつて行つた時に「極無自性」特別に自分の性質は限られたものではない、自性無しといふは、限らない、つまりどんな境界にても順應することが出来る。どんな所に居つても心の自由のはたらきが出来来る。斯ういふ事を大日經の中に言つてある。これは吾々の世の中に立つ教としては尊い教でありませう。

又云、大日尊、秘密主に告げて言く、秘密主、云何なるか菩提、謂く實の如く自心を知る等云云。

ばいけな。今の自分は解つて居る所もあれば解らない所もある、佛様と通ずるやうな慈悲の心持もあるけれども、時に依れば人を突き除けて自分の勝手をやりたいといふやうな心持もまるで無くなつた譯ではないといふことを知るのであります。

二三日前に横濱に参りました、或る會に出席してそんな話をしたのですが、私共は人の家に行つて留守だといふと腹が立つ、「折角来たのに留守で残念だ」と言ふ。その自分はその時に自家を留守にして居る、自分が留守にして置いて、人が留守だと言つて腹を立てたらおかしい、斯ういふ話をした。さうしたら其處に居た方が、「イヤ實は私も今他所へ行つて留守で腹を立て、来た所だ」と言ふ。實際その通りであります。吾々はどうも少しは理窟を言ふけれども、さういふ間違ひをして居る、言ひ出して見ると成程他にも同類が出来て来る。あなた方にもさういふ事があるかも知れぬ、遂々来たのに留守

これは有名な言葉であります。「菩提」といふのは覺りといふことです。どういふのが覺りだと言ふのか、「實の如く自らの心を知る」のである。これは大日經を讀んで見ると後にズツと詳しい説明がある。「實の如く自心を知る」といふのは、今の自分の心といふ意味です、自分の本當の性質は、佛様と通ずるやうな性質だけれども、併し現在の自分は迷ひがいろ／＼起つて居る、それを實の如く自心を知らなければいけない。現在ある通り、自分の心を在りの儘に知るのである。それが本當の覺りといふものだと言つてある。如何にもその通りであります。成程私共は佛様と同じやうな性質もある。けれどもまだ修養が足らず、信心も足らぬから、随分迷ひもあれば間違ひもあるのであります。それを知らなければいけない。自分の心の迷ひを知らない、自分はお經の一冊でも讀んで覺つたつもりで居るやうな飛んでもないことになるから、自心を知らなければ

で馬鹿々々しいと言ふ、しかし自分も留守にして居るのだから馬鹿々々しいことはありはしない、實に變な話です。だから實の如くに自分の心を知らなければならぬ、自分の心には實に佛様と通ずるやうな尊い性質もあれば、又一方には馬鹿々々しい間違ひをして、それを馬鹿々々しいと思はないで平氣で居るといふやうなことも随分あるのでありますから、實の如く自分の心持を兩方面から能く觀る。それが本當の覺りといふものであります。

華嚴經に云、一切世界の諸の群生聲聞乘を求んと欲すること有ること歎し。緣覺を求むる者轉復少し、大乘を求むる者甚希有也。大乘を求むる者、猶爲易く、能是法を信ずる爲甚難し。況や能く受持し、正憶念し、説の如く修行し、眞實に解せんをや。

「一切世界の諸の群生」といふのは、一切の生命の有る者、即ち一切の人。その一切の人々の中で、聲聞乘を求めようとする者が少い、「聲聞」といふのは幾度も申すやうに世の中を離れる心持、佛の教を聞いて、その佛の教の意味が解つて世の中に求める心持の無くなつた状態が聲聞であります。このくらゐな所になるのも甚だ難かしい、理窟だけは解つても、心の底から世間に求めないやうになることはなかなか出来ぬ。法華經は大慈悲を説いて居るが經だけでも、法華經を説きながら「どうか皆が真心して呉れれば宜い」と思つて居るのでは、それでは法華經を説いて居るのではない。聲聞にもなればしない。聲聞といふのは世の中に求めない心持が出来て初めて聲聞であります。だから成程理論は、難かしい理窟は解つたけれども、併ながら聲聞即ち世の中に求めない、人から何も與へられないでも何ともないといふだけの心持を起したいといふ決心を有つ

て居るかと言へば、それはなか／＼難かしい。それは今の世では難かしい、實際の上に於てはそれはなか／＼人間といふものは自己中心に物を考へるといふことをやめることは出来ないものでありまして、聲聞乘を求めんと欲することは難かしい。況してや「縁覺を求むる者轉復少し」縁覺といふのは、今言ふやうに世の中に執はれない心持を、教を聞いただけでなく縁に依つて覺る、日々出會ふ事柄と思ひ比べて、成程世間に求めるのはつさらぬものだと思ふ。それが縁覺であります。これは前の聲聞よりも一段上であります。即ち前の聲聞といふのは、佛の教を聞いてそれに依つて覺るのですが、今度は聞いただけでなく、自分の日常の事柄と思ひ比べて、成程此處だと捉まへるのでありますから、この方が一段上でせう。縁覺を求むる者は轉復少し、モウ一段少い。況んや「大乘を求むる者甚だ希有也」大乘といふのは菩薩行でありますして、慈悲を以て一

切の人に接する心持、始終慈悲の心持を以つて一切の人に接するやうな、さういふ修行をしたいと求めることは復た難かしい。併しマアそれもまだ「易しいかも知れぬけれども、「能く是法を信ずる爲甚だ難し」是の法といふのは佛に成る法です。皆が佛様を理想として、佛様と一致するまでは途中で怠つてはならないぞといふ、この教を信ずるといふことになる、これは容易に出来ないことである。

の家も似たやうに見える。更に紐育のウルワオースピルのやうな八、百尺の塔の上から見ると、高い建物も低い建物も皆同じやうに少く見え、背の高い人も低い人も皆豆のやうに見えてしまふ。だから一番高い所から見下せば、人間の少しばかりの違ひといふものは物の數ではない。私共が地位があるの無いの、金があるの無いのといふやうなことは、それは佛様の眼から御覽になれば、ちやうど八百尺の塔の上から下を見下したやうなもので、似たやうなものでありませう。碌なものはない、皆豆粒のやうなものだ、偉いの偉くないのと言つて見ても多寡が知れて居る。私共はさういふ事は時々理窟としては考へる。汽車に乗つて見ると一等の汽車はゆつかりして居るが、三等は込んで居る、だから一等に乗つた者は威張つて居る。併し高い山から見卸すと、一等車の窓も三等車の窓もありはしない、皆小さく見える。斯ういふやうに高所から見卸せば、そんな

これはどうもよくあることで、自分が少しばかり宗教の言葉などを知つて居つて、他の者と比べて見て、他の者が知らない、俺もこの頃大分偉くなつた」と油断をしてしまふのですが、佛様から見ればまだ／＼逆も段が違ふ。斯ういふやうに考へると非常に難かしい。私共が二階に昇つて地面を見下して見ると、背の高い人も低い人も同じに見える、吾々は二階だから下より上だと斯う思つて居る。ところが五重の塔の上から見ると、二階建の家も平屋

一七

差別は何でもない。だからそれを吾々には考へなければならぬ。吾々は佛様に比べれば何でも無い者だ。少しばかり智慧があると云つてもその智慧はコソマ以下だ、少しばかり覺つたと言つても覺つて居はしない。まだこんなことではつまらないと斯う思ふ。さう思つていつでも佛様と比べ合せてやつて行くことが出来るかといへばそれは難かしい。そこを本當に信じて行きますれば、吾々はどんな境遇に居ても何ともないといふ、實にしつかりした心持が有るのであります。

「況や能く受持し」受は心に信じ、持は身に行ふ、「正憶念し」まッ直ぐに間違ひなく覺えて居て、さうして「説の如く修行し」佛様の仰しやつた通りこの教を實行して行つて、眞實のこの佛様のお心持を理解するといふことは、これは尙更難かしいのである。

が、これを自分の身に背負うて、一劫といふ非常に永い歲月の間動かずに居るといふことは出来さうもないことであると思ふが、併し佛に成るまで怠らなるといふこの心持を有つ方がそれより難かしい。これは實際難かしい、どうも少しばかり物が解つて来ると緩み勝てすから、佛に成るまでは一度も怠らなるといふことは、世界を身に背負ふよりもモツと難かしいことであるといふくらゐに思つて、修行を勵まなければならぬのであります。

又大千世界といふ世界中の塵の數ほどの大勢の人間に、一劫といふ非常に永い歲月の間、いろ／＼な身の樂しみになるものをやる、美味い物を食べさせて、綺麗なものを着させて、大きい家に住はせてやるといふことは、實に親切なことで、大變な功德があるが、その功德でもまだ一番善いとは言へない、『是法を信ずる者、』佛と一致するまでは一生懸命にやらうといふこの心持で深く信ずる方が、大勢の

若三千大千世界を以て頂戴すること一劫身動かざらんも、彼の所作未だ爲難からず。是法を信ずる者は甚難し。大千塵の衆生の類に一劫の樂具を供養するとも、彼の功德未だ是勝れず。是法を信ずる者爲殊勝也。若掌を以て十佛刹を持し、虛空中に於て住すること一劫なるも、彼の所作未だ爲難からず、是法を信ずる者爲甚難し。十佛刹塵の衆生の類に、一劫の樂具を供養せんも、彼の功德未だ爲勝れりと爲さず。是法を信ずる者爲殊勝也。十佛刹塵の諸の如來を一劫恭敬して供養せん。若能く此品を受持せん者の功德、彼よりも最勝と爲す等云云。

三千大千世界といふのは廣い世界といふことである

人を樂しませる功德よりもモツと上である。或は又「佛刹」深い佛様の教の行はれて居る國を手につけて、虚空の中に於て一劫といふ永い間じつとして居るといふことは難かしいやうだけれども、それでもまだ難かしいとは言へない。この法を信ずることがまだ難かしい。或は佛の教の弘まる世界の十倍だけの中に一パイ居る總ての人に、一劫といふ永い歲月の間いろ／＼の樂しみを與へる道具を以て供養するといふことは如何にも功德が大きいけれども、それでもこの法を信ずる功德には及ばない。或は又その佛の教の行はれて居る國の十倍の中に満ちて居るところの塵の教ほどの大勢の人間に、一劫といふ永い歲月の間恭敬して供養する、たゞ物をやるのではない、禮を盡して供養するといふことよりも、この佛と一致するまでは決して懈けないといふので、この教を能く信じて實行する功德の方がそれよりもモツと勝つて居

これは言葉を書きつけて居るのでありますが、要するに人間の心の持ち方といふものはさうでなければならぬ。佛と同じになるまでは……といふ、この心持がいつでも心になければならぬ。さうすればどんなに偉くなつても自惚れることはない。又どんなにどん底に墮ちたところが悲しむことはありはしない。人間の上とか下とかいふことは、佛の境界から比べて見ればコンマ以下のものであります。でありますからそんなものの爲に心が動くといふことは、斷じてない筈のものであります。そこでそれが一番大事だ。斯ういふ事を言つてあるのであります。チヨット餘計なことを言ふやうであります。佛教がいろ／＼派が分れて、各宗各派で以て教學といふもの始めて、いろ／＼物を細かに分けて佛の教を説いて居る。そんな愚かなことはない。幾つにも教を分けて、五つに分け、十に分けて、大變偉いや

うだけれども、佛様のことを少しも考へない、たゞ寺の数を勘定したり、講の数を勘定したり、教を十に分けたり、十五に分けたりして居る、一體何のことでか譯が判らない。佛教を信じて佛を考へないで修行するといふことは、修行の根柢を失つたものであります。何にもなりはしない。だからいつでも佛に言つてある。佛を考へるといふことが一番大事だ、佛のことを片時でも忘れないやうにするといふことが根本だといふことを書いてあるのはそれであります。ところが吾々はどうも忘れ勝てあります。世間の小さい事に執はれて、佛と一致しようとか、佛様のやうな大きな慈悲心を見へるやうにならうといふやうなことは、なか／＼考へに浮ばない場合が多いのでありますから、斯ういふやうに華嚴經の中に説かれてあります。

涅槃經に云、是諸の大乗方等經典、後無

量の功德を成就すと雖も、是經に比せんと欲するに喩を爲を得ざること、百倍、千倍、百千萬倍、乃至百千萬倍も及ぶこと能はざる所也。善男子、譬は牛より乳を出し。乳より酪を出し。酪より生蘇を出し。生蘇より熟蘇を出し。熟蘇より醍醐を出す。醍醐は最上なり。若服することある者は、衆病皆除き、所有の諸業も悉く其中に入るが如し。善男子。佛も亦是の如し。佛より十二部經を出し、十二部經より脩多羅を出し、脩多羅より方等經を出し、方等經より般若波羅蜜を出し、般若波羅蜜より大涅槃を出し、猶醍醐の如し。醍醐と言は佛性に喩ふ等云云。

『諸の大乗方等經典』いろ／＼の立派な大乘の經典

であるから、無量の功德を成就する、斯ういふ尊い教を信ずればそれ／＼の功德があり、それ／＼善い事が出来るのだけれども、『是經』今涅槃經で説くことに比べて見ると、これはなか／＼及ばない。『百倍、千倍、百千萬倍』どんな数もどんな譬喩を取つても及ぶことが出来ないものである。今この涅槃經で説く教の方が上である。これは佛が最後に説きになつた教であるので、お釋迦様の御精神を打明けて説かれたのだから、これは他の諸經に説いてあることより上だ。譬へて見れば、牛から乳を搾つて、その乳を今度は鍋に入れて煮詰めてコンデンスミルクのやうなものを作る。これが酪です。そのコンデンスミルクのやうなものに酒を混ぜる、さうすると酒とミルクのどろ／＼混つたものが出来る、これが生蘇それからその生蘇を又煉つて居るとスツカリ兩方の味が融け合つて、混ぜたといふことが判らなくなつてしまふ。それが熟蘇。それからその熟蘇を暫く

貯へて置きますと、自然に發酵が起つて、さうして一番良い酒が出来、それが醍醐であります。これは何か私で自分で飲んだやうですけれども、私は飲んで譯ではありませぬが、さういふ順序であります。それと同じやうに、いろ／＼な教があつて、その教の中からだん／＼深い教を説いて行つて、一番終ひにお釋迦様のお心持をその儘説かれたものが醍醐といふものに當るといふのであります。これは有名な「五味」と言ひまして、五つの味といふこと言ひますが、その中で醍醐といふのは、これは最上のもので、若しこれを服する者があれば、どんな病でも除かれる價值のあるもので、どんな良い薬でも皆この醍醐といふものの中に味ひが含まれて居る。「佛も亦復是の如し」佛から十二部經といふ教が出て來た、この細かい説明は略しませうが、お經のいろ／＼な體裁に依つて十二に分けて居りまして、有ゆる經典といふことであります。その有ゆる經典の

中に佛様の仰しやつたものもあれば、他の人の言つたものもある。その中に於て佛の仰しやつたことが他の人の言つたことよりモツと深い。だからその十二部經の中に於て、「脩多羅」これはこゝでは佛語のことを言つて居る、佛の言葉です。その佛の言葉を取出して見るとこの方が深い。それからその佛の教の中にも小乗と大乘とあるから、その佛の言葉の中に於て「方等經」、これは大乘の經典で、つまり人間の慈悲を教たものと比べて見ると、この方が上だ。その方等經の中に於て、今度「般若波羅蜜」前に申した空智即ち平等の方を説いた教と比べて見ると、これは普通の大乗の教より又上だ。それからその般若波羅蜜の中から「大涅槃」今佛が入滅に際して、佛の眞實の心持を打明けて説かれたものと比べて見ると、この教といふものは醍醐のやうなものである。醍醐といふのは何に譬へるかと言へば、佛性に喩へる。佛の眞實の性質を説き明かすといふこと

が醍醐に當る。斯う言つてあります。

それで教といふものにだん／＼深入りして行くと、結局は佛といふものはどういふものかといふことを明かにすることが出来る。それを明かにするのが教といふものの絶頂だ、斯う言ふのであります。佛といふものが解らなければ一切の事は解らない。何故なら佛は完全なる智慧を具へ、絶大なる慈悲を具へ、限りなき力を具へて居らつしやるのでありますから、その佛といふものが解る時には一切の事が解る。それで結局は佛を知るといふことが大事になつて來るのであります。

それで涅槃經といふものは、前にも申しましたやうに、法華經の意味をモツと詳しく敷衍したものであります。だからこゝで涅槃經が上だといふことは法華經及び涅槃經といふ意味なのであります。これは日蓮上人も始終言つて居る。涅槃經なるものは法華經以上には出て居ない、法華經で急所を説いて居

る。併しそれではまだ皆に解りにくいから、それをモツと平易に擴げて説いたものが涅槃經であります。ですから涅槃經が一番上だといふことは、要するに法華經が一番上だといふことで、法華經をモツと敷衍したものが涅槃經だといふことに解釋しなければならぬ。さういふ譯でいろ／＼の經を讀むと、どの經にも善い事が説いてあるし、又どの經も「今まで言つた事よりは今言ふ事の方が深い事だ」、斯う言つてあるけれども、前に言ふやうに、法華經そのものが一番深いものだとなつて佛御自身が言つて、己に説さ、今説き、當に説くべき中でこれが第一だと言つて居らつしやる。今までに説いたものはこれに比べるものはない、今この靈鷲山で説いて居るものの中でこの法華經に比べるものはない、當に説くべきといふのは、これから後に死ぬまでの間にいろ／＼説くだらうけれども、それでも今この法華經より以上の深い事は説けないと言はれた、これは決して他

の者がきめたのではない、お釋迦様御自身がきめたことでありまして、以上挙げたいろ／＼な經典の言葉は皆有益であり、皆價值があるけれども、法華經の方がモツと根本的なものである。斯ういふことを言はれたのであります。

それでありまして前から申したやうに、法華經といふものの信仰が定まるならば、樹の幹が立つたやうなものでありまして、その樹の幹に枝とか葉とか花とか附いて居ると同じであるから、いろ／＼な法華經の言葉を皆學んで宜い譯であります。皆それ／＼の價值がある。法華經の信仰といふものは決して偏狭なものではない。その中心がきまらないうで、あれも宜からう、これも宜からうとやつたのでは、いつ迄經つても何を信じて宜いか判らない。中心といふものはしつかりと定めなければなりません。ところが氣を附けないと、『法華が大事だ、他のものは駄目だ』と斯うなつてしまふから、それでは困る。日

研究のことを言つたのであるが、宗教のこともその通りで、中心がチャンと一つ定つて來ると、有ゆるものが役に立つて來る。あまり狭くならぬやうに、又無暗に大風呂敷を擡げないやうに、そこは能く氣を附けなければいけないことでありませう。私などもどつちかといふと、薄つべらになり勝であれもこれもやつて結局ものにならないで困るのであります。これはあまり衰えた事ではない。又さうかと言つて、法華經以外のものは皆外道のやうに思ふのもこれも困つたことでもあります。要するに廣く一切に亘つて、さうして、その中心に於て法華經といふものをしつかり捉まへるやうにしたいものだと思ひます。(第三十二講了)

蓮上人御自身が、法華が大事だとは言はれて居るけれども、御遺文を讀んで見ると、この通り有ゆる經典を自由に引いて居らつしやる。法華經を信ずると斯う心の中心がきまつたら、何を讀んでも皆役に立つのでありますから、その所をあまり狭くならぬやうに、又あまり大風呂敷にならぬやうに、中心をしつかりときめて、さうして普く一切に及ぼすやうにして行くことが大事である。英吉利のハミルトンといふ人が、物事は漏斗のやうにしると言つて居る、これは面白い言葉であります。漏斗は上の方がズツと廣く開いて居て、結局一つ所に纏つて居る、このやうにやれと言ふ、實にうまい言葉であります。實際廣きに亘つて居るばかりで、薄つべらになつて煎餅みたやうになつても困る。併しさうかと言つてチューブのやうに細くて偏狭でもないやうに廣きに亘つて行つて、さうして一つ所にバツと纏まる、これではなければいけない。ハミルトンは哲學の

新京 日下部 二葉

御代の榮えをほきまつる

昭和十五年元旦

七十あまり七つの年を重ねたり

よろこひの齡と人はいひてし。

いたつらに命長きを何かせむ

生きて甲斐ある我なればこそ。

喜びをのへとも盡さし法の道

たとるよはひは神の恵みそ。

歡喜奉行

小西目喜

二六

一、魂に叫びかける！

魂よ！ 醒めよ！ 眠れる魂は働かぬ。
弱き魂はぐらつく。曲つた魂は恐ろしい。
悪しき魂は必ず亡ぶ。

快よく醒たる魂は必ず働く。喜び輝く魂は必ず萬人の魂を捕へる、永遠に榮える、必ず惱める凡ての魂を救ふ。
魂よ！ 『宅に柱無ければ保たず、人に魂無ければ死人なり』 (聖語)

「魂の抜け殻」が、どうして本當の事をするものか。
「魂の抜けた文明」に何の嗜ればらしい生活が有らう、
現實を見よ！
家を造り、橋を造り、飛行機を造り、人を造る！ 外觀

は愈々明るく、人心は愈々暗い。外は愈々騒がしく、人心は愈々淋しい。外觀の一部一部は善く成つた様でも、全體の人の世は、反つて安住が得られない。
それはどう云ふわけであるか？

二、本當の親へ！

靜かに考へよ！ 今の自分はどうして存在して居るのか？ 不滅の天地の力と、限りなき人の力に因つて、此身、此分別も出来るのである。
そこで大自然——天地——の親の外に、精神的に仰ぐべきの親は幾人も有るのか？
本當の親は一人ほかない！

x

三、本當に叫べ！

幾何學は我等に教へる——「二點間の最短距離は直線である」と。最高的人格と、我等とを結ぶ直線は信仰である。

其距離を益々縮め行く力は、題目の叫びである！

本當の時は、我等は叫ばずには居られない、萬人一同に動くには、此の叫びを擧げるに限る！

本當に叫んで見よ！ 本當に太鼓を撃つて叫んで見よ！
本當に精進の勇氣が出る！

我が内心の毒ガスを拂ひ去るにも、萬人の心の奥底を清め盡すにも、此際微妙の叫びに限る！ 最も簡單にして、最も力がある！

四、本當の力が出る

魂は内より強く叫ぶ——「快よく嗜ればれとなりたい。心地よく十二分に働きたい」と。此時こそ題目の生ける權威(権威)は、其力を振ふ。

今此の三界は皆是れ我が有つところなり (主親)
其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり (親徳)
而も今此處は諸の患難多し、唯我一人のみ (師徳)
能く救護を爲す (法華經卷第二、主・師・親三徳の本佛釋尊)

本當の親に感激しない者に、どうして本當の事が出来るものか！

本當の親の心を忘れたから、兄弟の間が水臭い！ 本當の親を否定する様な不知恩の者には、愈々争ひは強くなる！

佛法は體の如く、世間は影の如し
體まがれば影、斜なり。

(日蓮上人聖語)

本を忘れ、影に没頭する現代を見よ！
どんな豫算も見事はづれるぞ！

二七

『日蓮は日本の大難を拂ひ、國を保つべき日本國の柱なり』

『日蓮は日本國の魂なり』

嚴然たる人格の力に——勵まされ、指導せられ、支へられ——命を獻げて一つ又一つ、歡喜奉行する所に、何の行き詰りがあるものか！

佛祖と共に華咲く、「即是道場」の樂園を開拓して何の淋しさがあるものか！

日月の光明よりも明るく輝かしき如來への大道を歩みつつ何の暗さがあるものか！

振へ！ 振へ！ 凡ての魂よ！ 總ての魂よ！ 踊躍せよ！

謹告

來二月十一日は本會館開館八周年に相當仕候間午後二時より記念式典を舉行可仕此段豫告仕候

二月一日

財團 統一團
法人

立正安國の春

貴族院議員 井上清純

新年の御清集に私はチョット御挨拶をして歸るつもりであつたのでありますが、只今まで拜聴して居りますという御議論が出て居ります。けれども我國の進んで居る方向は、どうも今迄の御表示では盡して居らぬやうに思ひます。他の國であるならば何も申上げることはありませんけれども、我國の非常な大事な時でありまして、若しも一步誤つたならば、この國は九天から地獄の底に沈むかも知れない非常に危険な位置でありまして、どうしても七千萬國民が十分にこの時代を認識して掛らなければ、非常な危険が及ぶばかりでなく、五六年経ちますと復こんな事件が必ず起ると思ひます。さうして吾々子孫は永久に白人の爲に酷い目に遭はされるといふことは、鏡に掛けて見る如きものがあると思ひます。

聖徳太子様は佛教を何と言はれたかといふと、「輪寶の教」であると仰せになつて居るのであります、輪寶の教とは何で

あるかといふと、理想な國を造り上げるその方法を教へたものであるといふ意味であります。理想な國を造るにはそこにこれを邪魔するいろ／＼の魔軍があるのでありますから、魔軍を平げなかつたならば正義といふものは立たないのであります。熟々我國の今回の事變を見ますのに、これは肇國の精神から起つて居るのでありまして、宿命的な事柄であると考えなければならぬのであります。明治元年に 明治天皇様は國民一般に御宸翰を發せられて居るのであります、その御宸翰の一節に

今般朝政一新ノ時ニ膺リ、天下億兆一人モ其所ヲ得ザルトキハ皆朕ガ罪ナレバ、

と仰せになつて居るのであります。即ち天皇様の御天職は、人々をしてその處を得せしめるといふのであります。恰も太陽が萬物を生々化育するやうなあの慈愛の御働きを、昔から『しろしめす』といふ言葉で示されて居るのであります。そ

れ故に「すめらみこと」と申上げたのであります、統べしらしめず尊い御方であるといふのであります。即ち我國の政治の原理は世界に於ける政治學の原理に非ずして、モット高い所の大慈悲の表現でなければならぬのであります。我が國民の老若男女悉くその處を得せしめるのみならず、世界の人もその處を得せしめなければならぬ、それには深へる國を修理固成しなければならぬといふことを吾々の祖先は考へて居つたのであります。深へる國とは何ぞや、國家の中心點の無い國であります、中心點が動搖なき國を指してこれを深へる國といふのであります。隨て忠孝の大義が立たない國であります、隨て理想、操守の無い國を指して深へる國といふのであります。今や我國から見ると、東の方に當つては亞米利加合衆國といふ深へる國があるのであります、西の方面にはツビエツト聯邦、大英國といふ深へる國があるのであります。支那は大正元年に革命が起りまして、清朝が亡びると同時に國家としても亦亡んでしまつたのであります、今日の蔣介石政権の下支那は一つの社會であり、一つの地方に過ぎないのであります、深へる國ならばまだしも、深へる地方、深へる社會が存在して居るのでありますから、到底人類の理想の文明、眞個の平和を持ち來すことが出來ないことは當然のことでありました。然るに我國の天職といふものは、天照大神様の御神勅に依つて明かなる如く、我國を中心にして世界に眞個

の文明を持ち來し、理想的文化を人類に與へる爲に我國は存在して居るのであります、この深へる國を修理固成するといふことは我國の天職でなければならぬのであります。その爲には自分の國土が亡んでも宜しいのであります、日本の國が亡んでも宜しいのであります、この理想を護る爲にはこの國土が亡んでも宜しいのであります、それ故に今や三千年の間正義を養つて來た我國は、初めて亞細亞の深へる地方を修理固成するといふ天運が循環して來たのであります。斯の如き千載一機に於て、吾々の時代に於てこの驚くべき大事業を完成することが出來たならば、初めて祖先に對して申譯が出來、子孫に對しても申譯が出來るのであります。若しもこの際に於て吾々が失敗するならば、太平洋の波の下に沈んでしまはなければならぬのであります。中途半端の存在は斷じて許されぬ、進んで亞細亞の新しい建設に成功しない限りには、我國は亞細亞十億の民を背負つて太平洋の波の下に沈んでしまはなければならぬのであります。和蘭や、白耳義やブルガリヤのやうな存在は許されないのであります、進んで世界の大帝國となるか、退いて太平洋の波の下に沈んでしまはなければならぬかといふ運命に打突かつて居るのでありますから、一たび間違つたならば吾々は永遠に覆没してしまはなければならぬ非常に大事な時であります。この事を今から六百年前に日蓮上人が非常に心配されて、天皇御親政の御代

に戻さなければこの大使命を敢行することが出來ないといふことを仰せになつたのであります。法華經に「此の法は法位に住して世間の相常住なり」とあります、これは非常に難かしい言葉でありますけれども、日本の國に當嵌めて申上げたならば、國體の相が明に正しく現れた時に、初めて「世間の相常住」即ちこの國體は萬古に維持することが出來る、天孫無窮の皇運を扶翼することが出來るといふのであります。即ち北條氏の時代のやうに、天皇御親政が隠れて居つたならば危いのであります。御親政は絶対的の條件であります。天皇御親政が現れた時に、人々をしてその處を得せしめるといふことが起つて來るのであります、世界の國々をしてその處を得せしむるといふことも亦起つて來るのであります。それ故に支那のやうな深へる地方をその儘にすることは、我國の存在が斷じて許さないのでありますから、力はあるけれども無くても、この天業を恢弘しなければならぬ運命を有つて居るのであります。不幸にして途中で玉碎する場合があつても差支ないであります。是に於て初めて「立正」といふことが嫌として輝くのであります、立正といふことは精神でありまして、經濟上の問題を加味して居るではありません、物質的の意味を含んで居るではありません。總て精神主義でありまして、この正しい精神が立つた時に初めて世界に眞個の平和が成立つのであります、これは武力でもなければ財力

でもない、日本精神であります。日本の精神が輝く時に初めて世界は平和であります、日本の精神が輝く時に人類は幸福であります。その大なる理想を持つて三千年、我國は傳へて來て今日になつたのでありますから、この理想を行ふことに於て少しの遲疑を許さないのであります。

× ×

今や我國の神々が、吾々の祖先の何億何千萬の御祖先の靈魂が大陸にお渡りになつて皇軍を御助けになつて居るのであります。これが間違ひないところの事實であります、一たび支海灘を越えたならば全く人間が變るとさへ言はれて居るのであります。内地に遣つて居る人間と向ふに行つて居る人間とはまるで變るといふことは、さういふ自覺が起つて來るのであります、神々が導いて居られるのであります。過般上海の戰場に於て飛行機が爆撃作業を了つて歸つて來た、さうすると一つの飛行機は非常に遅れて後から着いたさうであります、見て居ると幾ら待つて居ても中から人が降りて來ない、不思議に思つて軍醫が内へ入つて見ると、二人の人は最早死んで居る、脈を取つて見ると十分間か或は二十分間前に事切れて居つたといふことであります。即ちこの飛行機は、人間は死んで居つてもその靈魂の力に依つて着陸をしたのであります、靈の力といふものは驚くべきものであります、實際に世の中に靈魂といふものは不滅であるといふことを戦

場に於て證明したのであります。斯の如き非常に強い緊張したところの働きを皇軍がやつて居るのであります。何故にさういふ働きが皇軍の中から行はれるかといふと、私共が日露戦争の時などに到底考へることの出来ないやうな崇高なる觀念に依つて、彼の人達は陸に、海に、空に、皇國の爲に、皇國の天職の爲に、人類の文明の爲に、人類の平和の爲に、亞細亞十億の民を救はん爲に、家を忘れ、身を忘れ、天皇の勅命を畏み戦つて居るといふことを、眞に私共は考へ直さなければならぬのであります。この驚くべき精神力は亞米利加を屈服し、英吉利を屈服し、ソビエツト聯邦を降若させてしまつたのであります。今やこの我國の精神力に及ぶものは全世界に一つもないのであります。そこに於て英吉利はどうしてもこの大勢を挽回しなければならぬと考へまして、最後の漢艦として二百五十億圓の五年計劃海陸空軍の大擴張をやつて居るのであります。今主力艦が十隻列んで建造中であり、如何なる武力を造らうとも、我國の造艦は斷じて負けないのであります。私は先年——今は絶對的に見せませんから判りませんが、先年吳の海軍工場を拜見したのであります。工場に行きますと大變な圓タクが工場内にありましたから、これは誰が使ふのかと聞きましてところが、職工の人達が皆使ふのである。送り迎へを圓タクでやつて居るといふことは非常に贅澤なやうに考へるが、それはどういふ意味を有

つて居るのかと聞きましたところが、近頃の職工は昔の職工と違つて、十名募集する場合に於ては百名もやつて来る、百名募集する場合に於ては千名も志願者が全國から集つて来るから、これを取捨することが出来ないで、已むを得ず苛酷な學術試験を行ふのである、隨て地方から小學校の優等生が澤山集つてしまつて、今日の職工は各地方から出て来る。それ故の職工の優等生だけに依つて占められたものである。それ故にわざ／＼此處に職工の學校を造つて彼等を教育して居るけれども、實に程度の高いものである。その人達が何と言つて居るかといふと、自分は一生の職務として職工をやらなければならぬのである、今や我國と英米の間に於てはおそろしい造艦競争の最中である、自分は前線に出て皇軍として働くことが出来ないが、自分の腕のあらん限り世界無比の兵器を造つて皇軍に供給しなければならぬと考へて居る、この造艦競争に於ては、頭腦に於ても、腕に於ても斷じて英米の職工などに負けない、大和民族は一つの日本精神を有つて居るのである。今や世界の文明は總て版收して、新たな人類の新文明を創造せんとする矢先に於て、吾々は英國や米國などの軍艦などを手本にして造らうとするのではない、頭の前から尻まで悉く日本人の創造したものである。さういふものを造つて一を以て十に當り、一を以て百にも當るといふやうな武器を供給しなければならぬと考へて居る、それ故に朝の一分間

でも遅刻することは出来ない、圓タクに乗つて駈つけるのである。過激な勞働に従事した後は、一分間でも早く家に歸つて休養を取らなければならぬ、その爲に圓タクに依つて往復して居るのである。私はそれを聞きまして、成ほど三萬五千も居る街とは到底見ることの出来ない淋しい景色であつたのに初めて判つたのであります。今迄のやうに途中で酒を飲んだりする者などは一人も居らない、皆緊張して業務に従事して居る姿を見て、この職工に依つて初めて日本の軍艦といふものが、どんなものが出来上がるかといふことをその時想像したのであります。果せる哉吾々が知らぬ内に大爆撃機は海を渡つて飛んで行つた。歐洲大戰の時に四箇年の間獨逸の飛行機が英國の倫敦を襲撃すること五十四回に過ぎなかつたのであります。我が爆撃隊は一箇月の間に七十八回に及んで大陸を爆撃したのであります。而も一回も途中で故障がなかつた、この爆撃は世界第一である。尙ほこの爆撃機よりもモツト自信のあるものが戦闘機であります。それ故に今日の戦闘機は、あの蘇聯の自慢な戦闘機に追着いて、これを皆落して居るのを見ても、如何に我國の飛行機が優秀であるかといふことを考へなければならぬのであります。その優秀な飛行機はこんな精神に依つて職工が造つたのであります。

「佛法は體にして、世間は影なり」精神が體であつて國は影

である、精神さへシツカリして居れば斷じて國は亡びない、國は負けない、眞個の不滅の信仰といふものはそこから起るのであります。今や英國の艦隊はシンガポールからこつちには斷じて来られません、米國の艦隊は布哇から西には一隻も出ることが出来ない、若しも出たならば悉く太平洋の洋上で粉砕されてしまひます。この驚くべき太平洋を制するところの大艦隊を右手に懐き、左手には百萬の軍隊を大陸に動員することの出来る大陸軍を持ち、毎年人口は百萬から殖えて行く大人人口力を持ち、毎年百八十億萬圓づゝ財産が殖えて行く大經濟力を持ち、世界無類の國體を擁護して、七千萬人の大和民族が團結して何が出来ないか。何事でも出来ないものはないのであります。些々たる蔣介石ですらも兎にも角にも支那を護めて居つたのであります。一つの海軍を持たないそんな小さい者が支那を護めて居つたのに、日本がこれを護めることが出来ないといふ理窟は到底ないのであります。而もこれが不正不義の戦ではないのであります。聖國の理想であつて、正義に依つて輝くところの戦でありまして、これを「天業を恢弘し天下を光宅する」といふのであります。神武天皇様はこの理想に依つて東征を遊ばされたから「神武」と申上げるのであります。これこそ神輪聖王の輪寶でなければならぬのであります。だから即ち釋尊は大宗教を開かれましたけれども、畢竟人類の文明、人類の宗教といふものは國家が

背景になければ實現は出来ないであります。國といふことが非常に大きな問題になつて居るのであります。即ち「國は法に依つて昌へ、法は人に因りて貴し。國亡び人滅しなば佛をば誰か崇むべき、法をば誰か信ず可きや。先づ國家を祈りて須らく佛敎を立つべし」と言はれた御言葉は、立正安國論の中核でなければならぬのであります。今やこの事が嚴然として現れて居るのであります。それ故に法華經は法華經の中にあるのでなくして、立正安國論は立正安國論の中にあるに非ずして、皇軍として「行」として現はれて居るのであります。これが菩薩行でなくて何でありますか、大きな菩薩行をやつて居るのであります。この菩薩行の中に初めて茲に理想的國家が建設されるのであります。間違ひなく建設出来るのであります。その中にこれに就て邪魔するものがあるつたならば悉く粉碎するのであります。その點に於ては神様が御助けなされ、佛が助けて下さることを確く信ずるのであります。この意味合に於て深く國民を導いて行かぬ限りには、二・二六事件よりモット大きな事件が國內に起りはせぬかと憂慮に堪へませぬ。



るのであります。今度は本當に心を入直して眞に立上らなければならぬ時が来たのであります。甚だ言葉が荒つばくなつたと思ひますが、この事を申し上げまして「立正安國の春」と後代の人をして此の新年を誦はせなければならぬといふ氣持があるのでありますから、どうかその意味に於きまして、私の話を過激なやうなお考でお聴取になつたかも知れませんが、衷心の憂、禁ずることが出来ないで、皆様の前に憚りなく所感の一端を披瀝致した次第であります。

精神力を若しも間違つて握つたならば飛んでもない事が世の中に起ります。最早我國は何遍もやり損ひまして、五・一五事件、二・二六事件を起して幾多の忠勇なる人を喪つて居

難局に直面して信念に生きよ

海軍少將 岩 野 直 英

年頭に方つて感想を述べるやうにといふ御註文であります。が、最近自分の考へて居る事を申上げて見ようと思ひます。皆さんと御同様に最近痛切に感じたことは物資の足りないといふ事であり、昨年の暮から米が高い、木炭が無いといふやうな問題で、大分世の中がやかましくなつて來ました。さうして、これは政治のやり方が悪いから斯ういふことになるのだ、斯ういふ不平不満の聲も大分高いやうであります。それに就て私は率直に皆さんに聴きたいと思ふのであります。皆さんは、支那征伐などといふ餘計な事をするからこんな暮しにくくなるのだと思つて居られますか。モット國民生活の安定を圖らなければ本當の政治ではないといふ風にお考へになりますか。日蓮主義を少しでも學んだ人は、恐らくさういふ事はお考へにならぬだらうと思ひます。何となれば、此の支那征伐は、大きな意味に於て國民生活安定の目的の爲にやつて居るのであります。若しも此の戦を日本が始めなかつたならば、今頃はあべこべに支那の方から、あの十

分に準備された抗日の軍隊がやつて來て、日本はやられて居るかも知れないのであります。それ故に日本としては已むを得ずして、全く國民の生活安定の爲に此の戦を始めた譯であります。それがだん／＼大きくなつて、今では國民生活といふよりも、モット目的の大きな世界の平和、日本から申せば天業恢弘の一段階といふやうになつて來たのであります。もと／＼此の大きな戦の起つた原因は、國民生活安定の爲であります。それは日蓮上人が仰しやつた通り、國が亡び、家を喪つたならば、何れの所にか一身の安堵をはかることが出來ませうか。これが抑々一番大事な問題であります。それより以下の、炭が足らぬから困るとか、戦などは早くやめるやうにして貰ひたいとかいふ不平不満を並べ立てるのは、それは考の非常に小さな人であると謂はなければならぬ。斯ういふ風に考へて來ると、どうでも斯うでも此の戦は最後までやり通さなければならぬといふ事が判つて來るのであります。細かな不平や叱言は言つて居られないのです。けれども苦し

い事は益々苦しくなつて来ます、今日の生活必需品の不足といふやうなことは、今年の内にはモツト甚しくなつて、あゝ正月頃はあんなことで不平を言つて居つたけれども、まだあの時は宜かつた方だ」と言ふやうになるであります。それはお互に覺悟しなければならぬと思ひます。

それからラチオを聞いて居りますと、毎日々々戦況の報道がありまして、我軍は逆襲して来る支那軍を撃退して、さうして彼の遺棄死體何千とか、總數何萬とか言つて居ります。それと同時に我軍の損害も、昨日は何十、今日は何百といふ風に、彼我共になか／＼損害が多いのであります。此の事は、内地の皆さんが日々生活にだん／＼不自由して居るのはと比較すると、戦地では如何に日本の軍人が苦しんで居るかといふことが判るのであります。皆さんはラチオを聞いて、我軍が勝た／＼といふと、愉快々々と聞えるでせうけれども、私共が専門の立場から聞くとなか／＼さう簡單ではない。あんなに敗けた支那軍がまだ／＼抵抗して居るといふことを考へると、百萬や二百萬の日本軍が大陸に行つて、あの廣い所を完全に掃討するといふことはなか／＼出来ない。一遍出て来た殘敵を日本軍が行つて追拂ふのはよいけれども、我軍が引上げて来ると又もとの通り。チヨウド海の波が一旦はサーツと引くけれども、又ドーツと寄せて来ると同じやうな譯であつて、到底日本軍の力を以て、あの大きな支那を

本當に征服してしまふといふことは出来ない。その爲に忠勇なる將兵は非常に苦しんで居ります、その苦しさは實に言語に絶するものがあります。皆さんの身内なり御親類にも、さういふ苦しい仕事に従事して居られる方が澤山あります。これも今後永く續くか續かぬかといふことを考へると、洵に心配な點があります。

それから占據した方面の資源を開發して、日本に都合の好いやうに物資を求めるといふこと、所謂經濟開發といふ問題であります。これが又なか／＼難かしい仕事であります。一部分石炭なり鐵なり採れる場所があつても、それを製造する所まで運搬するその途中が道路もナニも出来て居らない、さうして其處には敵軍が居るといふ譯ですから、これも表面だけで政府では計畫も圖面も出来て居つて、何時になれば新うなるといふお臆立は出来て居りますけれども、一つも實行が出来ないといふ譯です。それはやはり残念ながら日本の人手が足りない、それから金が足りない。せめて金でも潤澤にあつたら宜いと思ふけれども、その金が思ふやうに無いといふ有様であつて、これも中々容易な事ではないのであります。

それから近く出来るといふ汪兆銘の中央政府の問題であります。これも日本が讓歩に讓歩をして、さうして向ふの満足する所まで話をして、漸く日本の思ふ事が行はれるやうにも續くのです。さうして戦争で破壊した所を片端から建設して行かなければならぬ、それにはやはり澤山の金が要るのであります。何にしても金の問題が一番だと私は考へて居ります。

連絡の取れた政府が出来るのでありますが、それを極力日本が援助して行くといふのは、やはり澤山の金が要るのであります。そこで皆さんが檢約をして、公債を買ふとか、貯蓄をするといふことがどうしても必要になるのであります。が、何百億といふ金を政府がドン／＼使つて行くには、なか／＼そんな事では追付かない。其の金が無ければ、汪兆銘の中央政府といふものは出来ない。出来ても日本の思ふやうには動かないといふことになる。ところが日本はさういふ金をどうして拵へるかといふと、事實に於て計算上モウ日本にはさういふ力は無いのであります。

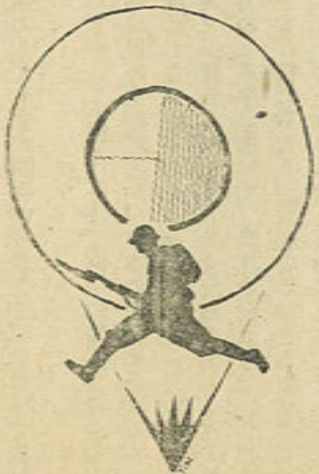
さうするとどうしたら宜いか。先づ他の事は兎に角として、金だけは外國に頼んで融通して貰はなければならぬ。それが爲に吾々は好むと好まざるとに拘らず、アメリカとは仲好くしなければならぬ、イギリスとも仲好くしなければならぬ、ソビエトロシアとも仲好くしなければならぬ、世界中と日本は仲好くしなければならぬのであります。さうして何處からでも日本に金を融通して呉れる所があつたら借りられるやうになつて居らぬと、日本は戦争が続けて行かれないのであります。何しろ支那は他の國とは違つて、大きくもあるし、敗けてもなか／＼敗けない國である。ワルソーを取ればポーランドが降参してしまふといふやうな、そんな小さな國ではない、敗けても敗けない國である、だから戦も何時まで

そこでそれをやつて行くには、何處の國は共產主義だとか、何處の國は民主主義だとか、日本の國體に合はぬからそんな國とは交際しないといふやうな譯には行かない。これからは先はソビエトだらうが、アメリカだらうが——アメリカは猶太の勢力の一番多い所です、世界中猶太でない所は殆んど無いけれども、殊に猶太人が無形の本國として居るのがアメリカであります。さういふ國とも仲好くして行かなければならぬ。日本の資本家はどうか考へて居るかといふと、さういふ猶太の金の力を借りなければならぬのだから、猶太人と喧嘩をしてはいけなと言つて居る。さういふ譯ですから、共產主義排斥とか、猶太思想排斥とかいふやうなことはモウ行はれないかも知れない。さういふ時勢が迫つて来ると、世界的のいろ／＼な思想が、金と共に日本に入つて来るといふことは覺悟しなければならぬ。その場合に、世界にタツタ一つしか無い此の申分なく成立つたところの日本といふ國家が、さういふ思想にだん／＼侵されて来るといふ譯です。ところがさういふ思想に對して十分に對抗の出来るものは、私

は日蓮主義に限ると思ひます。今や世界はスツカリ崩れてしまつて改造しなければならぬ、一遍世界各國がみなゴチャゴチャになつてしまはなければならぬ時節に迫つて来て居るので、吾々は外國の思想を日本に入れないといふことは到底出来ないと思ふ。入れても決して日本は崩れないやうにしなければならぬ。

それにはどうしたら宜いか。別に仕様はない。お互が信念堅固にして、どういふ悪魔が来ても侵されないやうに、どういふ病菌が来ても傳染しないといふだけの、堅固な思想を拵へて置かなければならぬ。それを拵へるのには、たとひ日蓮主義を標榜しても、グズ／＼して平凡なお説教ばかりして居つたのでは出来ない。それよりも、譯は解らぬでも構はないから、朝から晩まで力強くお題目を唱へて訓練をして行くことです。さうするとそれは不思議な力がありまして、決して雑多な思想に侵されることはない。日本人は、お題目を唱へて、さうして天皇陛下萬歳を唱へるだけの能力がありさへすれば、決して悪思想に侵されることはない。これは理窟ではない、私はそれを體驗して居ります。これさへやつて居れば、非常に心がゆたかであつて、どんな變な議論を聞いても、イヤさうではない、それはさうだといふことがハツキリ判るやうな人になることが出来る。私は信じて居ります。でありますから皆さんも、此の新年を迎へて、今年の心得とし

て、いろ／＼研究をなさることも結構ですけれども、是非共になさなければならぬことは、力を籠めてお題目を唱へ、さうして實祚の萬事を祈るといふ事を強くなすつたならば、恐らくこれから日本を攻めて来るところの世界の反國體思想といふものに侵されることは斷然ないと信じます。新年に方つて私は此のお題目を唱へる事と、日本天皇の萬歳を祈るといふ事を強く日々行事として實行することを提唱致しまして所感に代へる次第であります。



搖ぎ無きの心

小林 一郎

今年日本の國が創まつて以來二千六百年に當るといふこととて、各地に於て記念の催しもあるやうであります。ところがよく考へて見ると、二千六百年はかなり永いには相違ないけれども、日本の國は二千年や三千年で終るのではない、天照大神の神勅にも「天壤とともに窮り無かるべし」と仰せられてありますから、何百年でも何千年でも、人間の存在する限りは日本の國は滅びる筈はない。その限り無い年に比べれば、二千六百年とか三千年とかいふのはコマ以下のやうなもので、大したことはない、たゞ世界の外の國を見ると二千六百年が誠に有難い。英吉利とか佛蘭西とか、獨逸とか露西亞とか、支那とかいふ國を見ると、一つの王者の血統が二千年は愚か、百年二百年続いたことも珍しい。一時盛んだと思ふと他の者が取つてかはる。支那などは四五千年の歴史を有つて居ると威張つて居るけれども、四五千年同じ天子ではない。二百年でかはるとか、三百年でかはる、ひどいのにな

ると三年半ぐらゐでかはつて居る。又他の國から侵略を受け、だから同じ人種ではない、支那は十五六種の人間が入れ混つて居る。英吉利や獨逸でもみなさうです。初めから同じ王者を戴き、同じ人間が國を護つて居るものはない。その土地が開けた時から言へば、四千年も五千年もあらうけれども、終始一貫した國は世界の何處にもない。さういふ中に於て日本が神武天皇以來で二千六百年、その前は判らない。日本は神武天皇に創まつたのではないけれども、その前は曆もなければ歴史も無いから判らない、その時から言へば三千年であるか五千年であるか、殆んど勘定が出来ない位であります。此の永い間終始一貫して榮えて来た國は世界に類が無いのでありますから、先づ世界の他の國と比べて、日本の二千六百年がお目出度いと言つて吾々はお祝ひするのです。併し二千六百年になつたから、これから擧げて宜い……そんな料簡ではいけないので、これから將來はモット大事なので

あります。昔は子孫が十五歳になると元服するといつてお祝ひをした、チヨウドそれです。まア十五の元服くらゐだと思へば、これからモツト大きくなり、偉くなるのですから、これから將來が大事だと思つて前途を祝ふ、前祝ひをするのだといふ積りでなければならぬと思ひます。

その神武天皇の御創業といふことを考へて見ると、これはなか／＼榮な事ではない、艱難を重ね辛苦を積んで、初めて大和の橿原の都が奠まつたのです。神武天皇が日向を御出發になつてから橿原で御即位になるまでに足掛け八年を費して居る。神武天皇の御即位の前の詔には六年とありますけれども、それは大和の近くへお進みになつてからが六年で、日向を御出發になつてからは八年。此の間に非常な御苦心を遊ばされたので、なか／＼急に日本が出来たのではない。神武天皇のお兄様の五瀬命といふ方が、敵の流れ矢に中つておかくれになるといふ事もあつた。その他舊い歴史の古事記とか日本書記を読んで見ますと、其の間の御苦心、御苦勞は容易ならぬものであつた。或る時はモウ天皇の軍隊がみな腹がへつて腰が抜けてしまつてどうすることも出来なかつたといふ事もある。神武天皇の御歌の中にも「吾はや飢ぬ」腹がへつて腰が抜けてしまつたといふ御歌がある。これは容易ならぬ事でありませう。或る時にはみな疲れ果てしまつて、こんな所にグズ／＼して居つても先の見込がないと言つてガツカリ

してしまつた。その時に神武天皇が、さうガツカリするには及ばない、我が軍には神々のお助けがあるに違ひない、今この川の中に物を投げるから見て居れ、若し魚が浮き上つて来れば戦はキツト勝てるのだと仰しやつて、瓮の中に酒を一パイ入れて川の中に投げ入れたところが、魚が浮いて来た。それを見て全軍が勇を鼓して進んだといふやうな事もあります。或は例の八咫鳥といふやうな話もあつて、鳥が飛んで来て道を聞いたので、一両腰の抜けかゝつた者が又奮發して進んだといふこともありませう。大和を御平定になるまでの八年間の御苦心の跡といふものは容易ならぬものであります。

でありますから今日でも、天皇陛下が御即位の式をお擧げになる時には、紫宸殿のお庭にいろ／＼な露が並べられます、その露には、川の底から出た鮎の委とか、八咫鳥の飛んで来た委とか、いろ／＼のものが模様になつて居ります。それはつまり、國を建てるのは骨が折れるぞ、皆が骨を折らないでは何にも出来ないぞといふことを示すのであります。天皇の御即位といふことは、たゞお目出度いといふ事ではない、これから皆が力を協せて骨を折つて國を盛んにしろといふことを、内外に對してお告げになる爲のお儀式であります。さういふ事を吾々は考へなければならぬ。どんな事でも骨を折らずにうまく行く事はない。骨折りを吝んで居つたら殊な事は出来やしない。永い間の骨折りが報いられて一つの大き

な事が出来るのであります。一つの事を成し遂げるためには、十や二十ではない、何百何千の努力を積まなければならぬ。私はいつでも人に御馳走になる度にその事を思ふ。御馳走を食べるのはやさしいが、拵へるのは骨が折れる。支那料理などになると、豚の肉などは前日から煮るさうです。十五六時間も掛つて煮るといひます。その豚を食べる方は五分間くらゐで食べてしまふ。これは仕様がなない。十五六時間かゝつて煮たものだから、十五六時間かゝつて食べるといふ譯には行かない。馬鹿々々しい、五分間で食べるなら五分間で煮てしまへといつても、煮られはしない。拵へる方は骨が折れる、食へる方はスグ食べられる。世の中の事はみなさうです。一つの華やかな成功を得る爲には、何百何千の苦心努力を重ねなければならぬ。吾々が幸にして今日を送つて居るのは、永い間の祖先の努力の結果を受けて居るのである。吾々も亦これから後の爲に大いに努力をしようといふ覺悟を持たなければなりません。

今から三百五十年前、支那の明の時代に王陽明といふ學者がありました。これは孔子の教を研究する儒教の學者の中に於て殊に優れた人で、學問もあれば世の中の役に立つ立派な人であつた。ところが兎角さういふ學者ナンといふものは、人の意を迎へてお世辭を使ふことが下手なものですから、世の中に容れられないで、一時勢を失つて田舎の方の郡

書記の役、今で言へば判任官みたいなものに左遷されたことがある。王陽明は非常に不平で、自分は世の中の爲を圖つて居るのに自分の意見が容れられないで、片田舎の郡の書記などにされたのは馬鹿々々しいと思つたが、仕方がないからその任地に行きました。妻子を都に残して、自分の身一つで任地に参りました。行つて見ると田舎で農業ばかりやつて居るから、その農村を巡視しなければならぬといふので、その郡の、日本で言へば縣知事のやうな人の命令を受けて、村の巡視に出かけました。何しろ身分が低いので、お供などを連れる譯に行かない、一人で馬に乗つて行つて、村の入口でヒョット見ると、道の傍で、頭髮の眞白な、七十を過ぎて八十歳近いと思はれるやうな老人が、頻りに何か樹の苗を植ゑて居る。そこで王陽明が馬からヒラトと下りて、「オイ爺さん、お前は何をして居るのだ」「ハイ桃の木を苗を植ゑて居ります」「苗を植ゑたら直ぐ實が成るか」「成りはしません、まア三年も経つたら成るでせう」「サウか、爺さんに幾歳だ」「私は七十三です」「馬鹿な奴だナ、折角桃の苗を植ゑたつて、花が咲いて實が成るまでにお前は死んでしまふかも知れないぢやないか、何だつてそんな馬鹿な事をするのだ」と言つた時に、その爺さんが言ふには「成る程サウ仰しやると馬鹿々々しい事ですが、私は子供の時から桃が好きで、物心ついてから桃を食べるほど嬉しい事はなかつた、その桃は自分の植

また桃ではありません、親や祖父さんが植ゑた樹の桃です。私は親や祖父さんの植ゑた樹の桃を食べて毎日喜んで来たのですから、今度は自分の子供や孫が食べて喜ぶやうに桃の苗を植ゑるのです、自分が此の苗からとれる桃を食べようと思ふ譯ではありません」と言つた。王陽明はそれを聞いて、成程サウだ、人間はそれでなければいかん、あらゆる恩を受けて居るのだ、自分が今日一日斯うやつて生きて居る爲には、どれほど多くの人の恩を受けて居るか判らぬ、その恩に報いる爲に、自分が直接利益の無いやうな事に力を打込むといふことは當然の事である。自分はそこに気が附かなかつた。學者と言はれながら、少し自分の意見が行はれないと不平を起して、世の中を呪つたり人を怨んだりしたけれども、これは間違ひだつた、ナニも自分が今骨を折つて直ぐ効果が現はれないでも宜いのだ、自分は此の世に生きて居つて、天地のあらゆる恩を受けて學問をしたのだから、この恩に報いるために骨を折りさへすれば宜いのだ、ナニも報酬などは要らない、茲に気が附かなかつたのは濟まなかつた。『我書を読むこと四十年、此の一老翁に如かず。』自分は四十年間書物を読んで来たけれども、此の爺さんに及ばない、此の爺さんは書物など讀まないけれどもエライ事を知つて居るといふので、その爺さんの前に丁寧に辭儀をして『爺さんどうも有難う、お前のお蔭で善い教を受けたヨ』と禮を言つて、馬に

乗つて立去つた。爺さんは何の事だか判らぬ、ボカンと口を開けて見送つて居つたといふ話があります。

本當に考へて見るとこの通りでありまして、自分は多くの恩を受けて居るのでありますから、その恩に報いようといふ考へがあれば、自分の骨折が人に認められれば勿論結構であります、認められないからといつて、不平もなければ愚痴もない筈であります。殊に 神武天皇から算へてさへも二千六百年、その前から申せば限りない歳月を重ねた日本の國の國民として生れて、何處の國からも耻辱を受けず、何處の國からも侵略を受けずして、今日を平和に送つて居る私共は、この國恩に報いる爲に自分の仕事に力を盡すといふこと、これは當然のことでありまして、これが認められるか認められないか、知られるか知られないか、そんな餘計な事を考へるには及ばぬ、この決心が大事である。この決心が無ければ、不平ばかりで毎日を送らなければならぬ。人間の類が違ふ通り人間の心持が違ひますから、自分の骨を折つた事が人に認められると思つた日には、とても満足はありません。たとい親切にやる事でも、心持が違へば相手に満足は與へられない。私は始終サウ思ふ、お茶一杯でも自分の思ふ通りのお茶は飲めない、人の好みが違ふから、飲んで見ると過ぎるか、薄過ぎるか、熱過ぎるか、ぬる過ぎるかです。自分の思ふ通りのお茶といふものは自分が淹れるより外ない。勿論淹れて呉

れる人は親切に淹れて呉れるのですけれども、人の顔の違ふ通り好みが違ふから仕方がない。何でもその通り、人間は自分の小さい欲望を満足させるといふことの出来るものではない。己れを捨てなければ本當の満足はないのです。それを佛教などでは始終教へられて居る。人を許すといふ心持がなく、人間が世の中に満足の生活ナンといふものは、一日は愚か、一時間でも三十分でも逃げられるものではない。お互ひが自分の私心を捨て、行けば、そこに喜びがあり、満足がある。さうして此のお互ひの私を捨てた心持が相集りますれば、どんな大きな働きでも出来る譯であります。

いま日本の將來を考へて、吾々はシツカリと此の事を覺悟しなければならぬと思ふ。只今も岩野さんの仰しやつたやうに、何と言つても斯ういふ難かしい場合になれば、信仰の力に依るより外はない。信仰の力といふのはどういふことかといへば、自分を振返つて見て、本當の満足な生活を遂げようといふ覺悟をきめることです。これが信仰の力であります。

ウツカリすると、吾々は何しに生きて居るか判らないことになる。凡そ人間の希望といふものはいろ／＼ありますが、大概の希望といふものは影を追うて居るやうなもので、追掛けて居る時は面白さうだけれども、捉へて見ると大してよいものではない。吾々は貧乏だから、金があればよいと思ひますけれども、何處の金持が幸福ですか。金だけで幸福な人は世界

に一人だつてありはしない。金といふものは、無ければ無いで苦しい。あればあるで煩ひを起す。また地位の低い者は、自分は地位が低いから馬鹿にされる、出資をしたといふけれども、出世して高い地位に居つて誰が幸福ですか。歴代の總理大臣といふものは、日本の役人の中では一番上だけれども、どの總理大臣が、總理大臣である爲に幸福ですか、ありはしない。大抵は周圍から憎まれたり嫉まれたりして色色の事がある。吾々は汽車の内では辨當を食はうと、壽司を食はうと勝手ですが、總理大臣が汽車に乗ると新聞記者が一ぱい居つて、『ソラ壽司を食つた……お茶を飲んだ……』辨當一つ落着いて食へない。さうしてうまく行かないとピストルで殺されてしまふ。總理大臣ほど不幸な人はありはしません。何が一體幸福ですか。身分が低ければ低いで馬鹿にされるから不幸、高くなれば高くなつたで周圍中から文句を言はれるから不幸で、人間の境遇といふものは人間を幸福にするものではない。子供の時には、子供だといつて馬鹿にされる、早く大きくなりたい、大人になりたいと思ふ。大きくなつて吾々のやうな老人になれば、先が短いからやはり子供のほうがよいと思ふけれども、今更子供にはなれない。一體人間の年頃はいつが幸福か。二十が幸福か、三十が幸福か。二十になれば三十になりたい、三十になれば四十になりたい、四十になれば五十になりたいと思ふけれども、五十を過ぎるとソロ／＼

先が短くなる、やつぱり二十代がよいナといふことになる。私の子供は二十代で、日曜日には山に行つたり川に行つたりして遊んで居る。親父は日曜日でも山にも川にも行けない、こんな所に引張り出されて喋らなければならぬ。親父ほど馬鹿々々しいものはないといふことになる。ソレ御覽なさい、人間の幸福といふものは周囲から與へられはしない。金だつて位だつて、勢力だつて何だつて、決して人間に幸福を與へるものではない。たゞ／＼自分の世の中に生きて居る本當の意義を認めて、自分の骨折りが何かのお役に立つて居る、眼に見えても見えないでも、何かのお役に立つて居るのだといふ所に本當の満足を感じる以外に、人間の満足といふものはないのですそれを教へるのが宗教です。佛教で言へば菩薩の行と申しますが、己れを捨てるといふことが己れを大きくする道である、自分の骨折りが人の喜びになるといふことに心からの満足を感ずるやうに、自分の心を立て直すといふことが菩薩の行であります。これが出来なければ人生はつまらない。例へば子供が小さい時には、大きくしたい／＼と思つて大きくするでせう、ところが二十歳位になると生意氣になつて、親父は頭が古いナンと言ひ出す。これは大きくするのぢやなかつた、小さい儘にして置きたいと思つても今更どうにもならない。だから子供を大きくして、子供からお禮を言はせようと思つて育ててはいけない、育てる事その事に

といふことになる、今も岩野さんが仰しやるやうに、一から十まで金が必要。支那は金が無い。民間には金持はありませんが、國としては金はありません。サア鐵を掘れといつても、鐵を掘る金は支那には無い。サア石炭を掘れと言つても金は無い。此處へ汽車をかけると言つても金はありはしない。「何分頼みます」といふことになる、これは日本が貸してやらなければならぬ。日本が貸してやらなければ、英吉利へ行つて借りるでせう、亞米利加へ行つて借りるでせう。支那としてはそれより外はないのです。

又よく考へて見ると、英吉利や亞米利加が支那に勢力を扶植して居ることは、昨日や今日のことではない。英吉利が支那に入り込んでいろ／＼な事業を起したのは、日本の時代で言ふと徳川の十一代將軍家齊といふ人の時で、今より百五十年ばかり前です。それ以來英吉利人は支那に入つて居る。さうして上海に港を作つたり、香港に港を造つたりしてやつて居る。だから英吉利人を捉へ話をして見ると「何だ日本の奴、此の頃になつて支那を指導するといふのか、俺の方は百五十年も前からやつて居るぞ」と言ひます。私が倫敦で基督教の宣教師に會つていろ／＼話をした、時に「君達は佛教の人ださうだが、佛教を支那へ入れるつもりか」と言ひますから「サウだ、佛教は昔印度から支那を通つて日本へ來たのだ、これから一つ佛教で支那人を大いに指導してやらうと思ふ」

喜びを感じて行くのです。此の子供を大きくして、これが世の中のお役に立つといふ事に心から喜びを感じて行けば、そこに子供を育てる甲斐がある譯です。萬事がサウです、自分に取る分を考へてはいけない、與へる方ばかり考へて行きさへすれば、そこに不平もなければ文句もない譯であります。

今日日本が世界に發展をしようとする時に、なか／＼國の前途といふものは容易ならぬものであります。支那を相手に戦をして居りますが、一體何を目當にして戦つて居るのか。此の頃汪兆銘が新しい政府を作らうとして、近衛聲明々々といふことを頻りに言つて居る。近衛聲明といふのは何だといへば、近衛さんの總理大臣であつた時に、日本は支那の領土を取つたり、利益を収める爲に戦をするのではないといふことを聲明した。支那から言へばうまい話です。だから汪兆銘はこればかり振廻して、土地は上げませんヨ、利益は上げませんヨ……こればかり言つて居る。又これが亞米利加や英吉利や、世界中に注意されて居る。だから支那と戦をしてどれほど人間が死んでも、どれほど金が費へても、此の戦の爲に支那から一坪の土地も取れない、一圓の金も取れやしない。此の戦の結果といふものは、支那に眼を覺まさして、支那を指導して、支那にあらゆる事業を起さして、さうして日本と支那とが手を携へて東洋の平和の中心を作らうといふ事以外に何にもありはしない。そこで支那を指導して事業を起させる

と言つたら、その英吉利人が「そんな事は駄目だ、佛教は漸く此の二三十年支那に入つたのぢやないか、俺の方はバイブルを支那語に譯して以來百年経つて居る、お前達あとから來ても駄目だヨ、諦めたまへ」と言つて居りました。その通りに、日本が支那に手を着けない前に、英吉利は支那に手を着けて居る。その英吉利人が今更オメ／＼と手を引きはしません。今の所は日本の勢力が盛んだから彼此れ文句を言はないけれども、機會があれば盛り返さう、日本の勢力を追拂つて英吉利の勢力を支那に下ツツリ据ゑようといふことは、英吉利人は常に考へて居る。亞米利加もその通りです。亞米利加は英吉利のやうに百年以上の歴史は有つて居ないけれども、少くとも八九十年來支那に入り込んでいろ／＼な事業を起して居る。日清戦争と日露戦争の間に北清事變といふのがあります、支那に一揆が起つて北京などは大騒動であつた、日本人も英吉利人も亞米利加人も殺された。あの北清事變が済んだ後で——まだ支那が共和政治にならない、清朝の時代であります、支那が各國に迷惑をかけたといふので償金を拂ふことになりました。その償金を、日本も受取つたし、英吉利も佛蘭西も獨逸も受取つた。しかし亞米利加だけは受取らないで返したのであります。尤も只是返さない、その返した金を以て、あなたの國は教育が盛んでないから學校をお建てなさい、あなたの國には大學などは一つも無いではありません

か、是だけの金を返すから大學をお建てなさい、斯う言はれて建てたのが支那の大學の初めです。その時に亞米利加の金で大學を建てたから、先生はみな亞米利加から招んだ、その亞米利加人が支那へ行つて教育をした。さうして其の大學生の中で見込のある者は、お前俺の國の亞米利加へ留學に來なさい、俺の國の人間は親切だからよく教へてやるよと言つて留學させた。其の亞米利加へ留學して、亞米利加でいろ／＼の事を習つた連中が、モウ今では錚々たる政治家になつて支那の政界を左右するといふやうなことになる。顧維鈞といふ男が一時盛んに活動したが、あれは亞米利加に五年位居つた、亞米利加の女を細君にして居る。名前も西洋流の名にしてしまつて、支那へ歸れば顧維鈞ですが、歐羅巴や亞米利加ではカーチナル・クレーといふ名前でも通つて居る。あゝいふ連中が支那の政界を掻き廻して居るのだからなか／＼容易ならぬ事です。ですから亞米利加人は、何と言つたつて支那に於ける亞米利加の勢力は崩れるものぢやないぞと信じ切つて居る、そこへ日本人がやつて行くから、「何だ日本の奴、生意氣だ」といふことになるのです。

斯ういふ事を算へ立てれば際限がないのでありまして、日本が此の戦に勝つたからといつて、勝つた勢に乗じて支那を萬事自分の指揮命令の下に動かさうと思つても、なか／＼それは容易ならぬ事です。英吉利はどうしても頑張る、亞米利

加もどうしても頑張る。其他の國も決して支那に於ける野心を捨てはしません。だから今は汪兆銘といふ者が日本に頼つて來て居りますけれども、日本人たる者が油断をしてはならぬのでありまして、これから後は、日本が支那へ入り込んで行きます時に、英吉利の資本も入りませう、亞米利加の資本も入りませう、露西亞人も入りませう、佛蘭西人も入りませう。獨逸なども油断をして居ればどういふ事をやるか判りはしません。獨逸といふ國は偉い國ですが、日本に對しては實に不埒千萬な國で、防共協定ナンと言つて日本を仲間に入られて置いて、一方では露西亞に盛に武器を賣つたり彈藥を賣つたりして儲けて居ります。ノモンハンで敵の大砲や戰車が非常に優れたものだった、よく調べて見るとそれは獨逸で出來たものが澤山入つて居る。一方では日本を防共協定ナンと言つて儲けて置いて、その相手の露西亞に戰車や大砲を賣つて、それで日本を撃たして居る。何が防共協定ですか。斯ういふ連中が世界中に居るので、油断は出來やしません。日本が日の出の勢であるのを見て、これを抑へ付けようと思はない國は世界中に一つもありません。たゞそれが露骨に出るか、おとなしく出るかの違ひでありまして、亞米利加は露骨に出て居る。亞米利加だけが憎いと思つてはいけな

い、敵だと言へば世界中みな敵です。けれども今もお話のあつたやうに、無理に敵にするには及ばない。こつちは誠意を

持つて行けば宜い。亞米利加も日本の事業を助けるなら相手にするが宜いでせう。けれども心にはしつかり引締める所がなければならぬ。少しばかり煽てられて直き逆上せしてしまつてはいけな

い。一體日本人は直きに逆上せる。日本は世界に類が無い國だ、誠にお目出度いなどと言はれると、「ハ、アそろ／＼判つて來たかナ」といふやうに逆上せしてしまふ。そろ／＼判つたのぢやない、「そろ／＼胡麻化しに來たナ」と思はなければいけない。そんなにお人好しではいけない。けれども、人が嘘を吐くからこつちも嘘を吐いて宜いといふことはない。人が策略を弄するからこつちも策略で行かなければならぬ。そんな馬鹿な事はないから、こつちは飽きでも一つの方針を立てて行かなければならぬのであります。が、それには是から此の支那の大陸を舞臺として、英吉利とも亞米利加とも、獨逸とも佛蘭西とも競争して、實力を以て彼等を屈服させるといふだけの覺悟が無ければいかぬ。戦には勝つたが戦だけではない、商賣をしても日本人の商賣が一着うまい、品物を拵へても日本人が拵へれば他の國よりも良

い物を安く拵へる、教育をしても日本人が支那人を教へれば、他の國の人よりもよく教へてやるといふ、實際の事柄を以て、事實日本人が優秀であるといふことを、支那人は勿論、世界の國々にも認めさせるといふ覺悟が無ければ、四年越しの戦は結局ゼロです。これが銃後の務といふものでありま

す。銃後の務といふのは、病院にお見舞に行つたり、停車場で旗で振るといふ事だけではない。戦争の後を承けて、事業に於ても、學問に於ても、思想に於ても、斷然世界の他の國を壓服するだけの成績を擧げるといふ、此の覺悟があつて初めて銃後の務と言へるのです。それが出來なければ、靖國神社へ行つてお辭儀を幾らしたつて何にもなりません。どうも御苦勞さま……死んで下さつて有難うございます……あとは出鱈目です……そんな事が言へるものではない。本當に吾

吾は戦の後を引受けるといふしつかりした覺悟を持つて、初めて靖國神社へ行つてお辭儀の一つもすることが出来るのであります。此の覺悟がしつかりとしなければならぬ。そこが宗教の信念の大事な所です。眼の前の報酬など考へない、人間として本當に生き甲斐のある仕事をするといふことに、心からの満足を感じるといふ人を造らなければいけない。さういふ點から言つて、宗教の信仰を有つて居る者の責任といふものは極めて大きいのであります。

ところが私共は凡夫でありますから、佛様の有難いことも知つて居るけれども、ウツカリすると自分の私が出て來る。人を惡むことも知つて居るけれども、あまり骨折つて感謝でもされない、ツイ馬鹿々々しいといふ氣が起る。それだから世の爲、人の爲に力を盡さうとすれば、先づ以て自分を完全にしなければならぬといふことになる。そこで宗教的生活

といふものは理窟だけではない、理窟だけでは、今申したやうに一通りは判つたやうでもなか／＼それが行はれない、どうしても人間の私の心が出て来るのであります。そこで宗教に於ては『身口意の三業』といふことを教へられるのであります。身に行ふ事、口に言ふ事、意に思ふ事、この三つが揃はなければいけない。身にも善い行ひをしなければならぬ、意にもしつかりした心持を持たなければならぬ、口にも善い事を言はなければならぬ。宗教は生きた命を完全にするものでありますから、この三業の一つも離れてはいけませんのであります。佛様が有難い、たゞ『有難い』と思つて居たらそれで宜いといふではありません。有難いことを口に言はなければいけない。有難いことを身に行はなければいけない。それでどうしても、宗教には儀式といふものがありまして、題目を唱へるとか、佛を禮拜するとか、經を讀むといふことをしなければならぬ。口で言ふことが心にも響いて来るので、自分の口で言つたことが、自分の耳に聞え、自分の心に響いて、自分の心が立てなほる。また心にしつかり考へて居ることは、自ら言葉にも行ひにも現はれる。だから身にも修行しなければならぬ。心にも修行しなければならぬ、口にも修行しなければならぬ。朝寝をして晝寝をして宵寝をして、酒を飲んで酔ばらつて人と喧嘩をして、『心の中だけで佛様が有難いと思つて居る』と言つても、それは夢のやうなことです。

斯ういふ譯でありますから、どうかお互の信仰的の生活といふものに依りまして、身にも心にも佛の大慈悲が自ら泌みわたつて、行ひにも現はれ、言葉にも現はれるといふやうになりたいものだと思ふのであります。それは急には行きますまいけれども、強めて息まなければ必ずそこまで行くのです。小さい事を小さいと思つてはいけません。一人の人の力がその家を善くする、一つの家が明るくなれば、お向ふもお隣りも明るくなる。小さい事を小さいと思つてはいけませんのであります。

私先日日立鐵山に参つたことがあります。彼處は元は金山でありましたけれども、近頃は日立製作所といつて、自動車だのタービンだのいろ／＼の物を造つて居ります。私の學校の卒業生が職員になつて居るものですから、招かれて行きまして、大勢の人を集めて話をしました。それから工場を視ましたところが、一つの部屋に眞鍮の棒ばかり磨いて居るのがある。私の學校から出た者が職工の監督をして居るので、『オイどうだい、こんな事ばかりやつて居るのか』と云ふ。それから私は『サウだらう、それは無理はない、マアチヨット外へ出て見たまへ』と言つて外へ引張り出した。そこには立派な自動車が組立てられて居る。『どうだ、立派なものぢやないか、君達の磨いて居るあの棒が此の自動車の役に立

つて居るのだ、あの棒が無ければ此の自動車は出来やしない、だから棒ばかり磨いて居ると思つてはいけません、あの自動車を掃へるのだと思へば宜いぢやないか』と云ふ程サウです。『棒ばかり見て居ないで、時々外へ出て自動車を見るが宜い』と言つてやつたのですが、實際その通りです。小さい棒ばかり磨いて居ると思へばつまらないけれども、此の棒が無ればあの立派な自動車が出来ないのだと思へば、棒を磨くにも大きな張合がある。人間の事はみなその通りで、小さい事が集まらずに大きな事は出来やしない。國家が大いに發展するといふのもその土臺は、吾々國民一人々々が此の手の仕事、足の仕事でやる事が土臺になつて出来るのだと思つたときに、自分自身の毎日の仕事といふものは非常に尊いものになる。こんな有難いことはありはしません。それをよく考へなければなりません。その考が附くか附かないかに依つて、その人の生涯の運命が決定するといつても間違ひではないだらうと思ふのであります。

斯ういふやうなことを考へますと、今二千六百年を迎へまして、日本が大いに世界的發展をするに當つて、ナニも變つた事をやるには及ばない。これからお互に心を勵まして、自分達の毎日の仕事に本當に力を盡せば宜しい。その力を盡さうと思ふと、吾々は凡夫ですから、迷ひが後から／＼起つて來ますから、その迷ひを拂つて、佛に近くなる爲に題目を唱

へよう、佛を禮拜しよう、經を讀まう、修行をしよう、斯う思つてやつて行けば、お題目の一つの聲の中にも、國を發展せしむる力が籠るといふことが解る譯です。それで行くより仕方がありません。ナニも今更周章するには及ばない。世界中がどうならうと、吾々は吾々の態度を以てシツカリとやつて行けば宜い譯であります。

年の初めに方りまして、元日のお晝から若い人が二三人來たので、一緒にお雑煮を食べて、明治天皇の御製を一緒に讀みまして、この御製の中に籠つて居る、明治天皇の洪大なるお心持を拜して、此の心持で今年も一つやらうぢやないかと、いふことを話し合つたのであります。その御製の中に、今更ではありませんが拜誦する度に有難く思ひますのは、

山の奥島のはてまでたづねみん

世に知られざる人もありやと

といふ御製であります。山の奥で働いて居る人がある、島のはてで働いて居る人がある、身分もなければ地位も無い、世に知られないで黙つて働いて黙つて死んで行くだらうが、その黙つて働いて居る人の力が集まつて國が發展するのだから、山の奥をもたづねてやりたい島のはてまでたづねてやりたい。世に知られずして苦心して居る者に對して、御苦勞と言つてやりたいぞと、明治天皇は仰しやつた。此のお心持を身に體しますならば、世間的の地位だの名譽だの、そんなも

のは要らない。どんな山の奥でも、どんな裏長屋の隅でも、自分の仕事に魂が打込まれるならば、それは國の發展の土臺であるとして、上御一人は確に驚はして居らつしやるのだ。

斯う思つた時に不平もなければ愚痴もない譯です。私はこの御製を拜讀して若い人に言つた、君達はこれから世の中に出てどうなるか判らない、大いに出世をするかも知れない、つまりまらなく一生を終るかも知れない。うまく金が儲かるかも知れない、貧乏になるかも知れない、併しそれはどうでも宜いぢやないか、山の奥でも宜い、鳥のはてでも宜い、役所の隅でも宜い、工場の真中でも宜い、己れの力を自分の仕事に打込んでやることに於て、それが國の發展する土臺になるといふことは、上御一人は御存じで居らつしやるのだ、斯う思つてそこに満足を感じなければならぬぞといふことを話し合つたのでありますが、どうか此の年の初めに當つてお互が此の心持をもちまして、勇ましくあらゆる艱苦に耐へ、あらゆる困難を冒さうといふ決心を致しまして、お互に信仰を勵み、また國民の一人として自分の力を果す上に於て搖ぎの無い覺悟をシツカリと立てたいものと存じます。(J)

福島支部報 (記事つゞき)

一月十七日 於高商如春莊 磯部先生を迎へ本年度第一回の例会を行ふ。一同動行後、磯部先生より「法華經の妙旨」と

題し御法話あり。終つて高商校長伊藤仁吉先生が第八高等學校長に御榮轉なされるので支部員並に鐵仰會員三十數名出席の下に送別會を開く。

伊藤先生は御夫妻共に熱心なる日蓮主義の鐵仰者にて高商例会には毎回御出席下され、校長夫人は支部例会にも御出席なされ陰に陽に我々を御鞭撻御清授下さつて居た。

開會に廣り磯部先生、岩井支部長、鐵仰會幹事の送別の辭あり、やがて校長先生の御挨拶の後、一同會食を共にし八時半散會す。

北京統一團支部

一月十一日 北支の天地に本團支部が設置されたことは時節柄定に法慶至極である。場所は西單北大街の種村氏御住宅で同夕第一回の清筵を營まれた。こゝに來る迄には、福岡、種村、田中等の同志が非常に忙しい中を、多大な肝入りであつたことが一入尊い有難い事である。勿論始より華々しい事は欲せず、眞剣に求道の士女に依り、堅實に純正なる日蓮主義を信奉せる者を以て先づ中軸を礎いて行く。

當夜は約十名の同志を以て、初めに勤行、次で日蓮聖人正傳の輪讀、後座談會の順序で試みられた。毎月の例会は一日に定めてある。嗚呼、一華咲いて天下の春を知る、切に御自重を念じ偏へに御佛の冥護をお禱り申上げる。南無妙法蓮華經

宣撫斑從軍より歸りて

陸軍省囑託 中山正男

はじめに

豪戦をやり遂げるために、そして又新しい支那の建設のため日夜をわかつた、しかも寒氣の激しい大陸で御奮闘なされて居られます兵隊さんに心から感謝申し上げます。

私は今回、兵隊さんと同じ様に御苦勞されて居ります宣撫班のことに就いて御話し致します。私は北支の宣撫總班長をなさつて居らるゝ八木沼丈夫先生の知遇を得て居るもので御座います、先生からは多年に亘つて宣撫班の崇高なる精神と、その行動に就いての御話を承はり、深く感銘して居つたものであります、今夏七月、陸軍省情報部より宣撫班に關する資料蒐集のため北支へ派遣せられることとなり、茲に宣撫班の活動を眼のあたりに見る機會を得たのであります。

宣撫班の本義

宣撫班の本義とでも云ひませうか、宣撫班はどんな心で支

那民衆を宣撫するのかと云ふことに就きましては、八木沼總班長は、この様に申されて居ります。

「豪戦は三種の神器の大御心を體して戦ふのであつて、八絃一字は『八咫鏡』に照し、破邪顯正は『草薙劍』で拂ふ。宣撫班は『八坂瓊曲玉』で救ふ。そして宣撫班は『八坂瓊曲玉』の大御心を體して支那民衆を、宣正撫民する。宣正は正義を宣べ、撫民は民を撫す、從つて宣正することによつて民を撫すのであります。これを佛教の解釋によりますと八絃一字が、『一天四海、皆歸妙法』破邪顯正が、『振伏』宣正撫民が『攝受』と言つて居るのであります。ですから宣撫班は、佛教精神によれば攝受にあたるわけです。又皇軍を御父様にとへれば、宣撫班はお母様になるのです。容共抗日の迷路に迷ふてゐる支那民衆を、正しい道に引き戻すべく父親の折檻が行はれる、その民衆に道理を解けて正しい道に就かされる母親の救護が施される、この姿が現在の姿であります。」

とかように八木沼先生が申されて居るのであります。さて、これからは武器なき戦士であり、戦場の母である宣撫班の崇高なる活動について、一つ一つの實話をもつて銃後の皆様にお話し申上ります。

これも總班長の御言葉で御座いますが

「一人のためにまことを盡し得ざるものは、一人のためにまことを説くことは出来ない」
の教訓を體して一人の宣撫官が、一人の支那婦人に大きな犠牲を拂つてまでも「まこと」をつくした實話を述べませう。

宣撫官と支那老婆

京漢線の順徳の一寸手前にある内邱と云ふところの宣撫班長は、大澤重雄君でありました。今年の三月頃の事件ですが、ある日大澤君が巡回工作から歸つて風呂に浸つて居りますと、急に門の方が騒がしくなつた。何事が起きたのかと思つて急いで行つて見ると、大勢の支那人が一人の怪我人を擔ぎこんで來たのです。見るとその怪我人といふのは中年の支那婦人でしたが、實にひどい重傷を負つてゐるのです。頭の真中が、長さにして約四寸位割られてゐる、手にも四ヶ所位深い傷がある、ひどい出血で傷口が見えない位血が盛りあがつてゐるのです。もう息も絶え絶えで全くで瀕死の状態でした。大澤君はこの姿を見て餘りにも酷いので茫然としたので

所詮助かる見込みもないから手當をしても無駄です、この儘歸してしまつたらどうですか、それに輸送の關係上繃帯も薬品も残り少なくなつてゐて、この病人に施せば全部が失くなつてしまふ、そうすると今後の宣撫工作にも効果をそぐから、やめませう」と、言ふ意見であつた、これを聞いた大澤君は決然として言つた。

「たとへ繃帯と薬品が全部無くならうとも、この婦人に最善の療治を盡さなければならぬ。宣撫班は無駄だから、有效だからと云ふ實利主義でやつてゐるのではない、一人の血脈の中に永劫に流れ宿る愛情を植え、それが日支恒久平和への大信愛となつて結ばれる、そのためにこそ宣撫班が働くのだ。こう云ふときに私は、總班長の訓話を思ひ出す。

宣撫工作に大事な、醫療機、薬品、食料、傳單、そう云ふものが、何に一つ失くなつたとき、宣撫官は如何なる方法によつて宣撫するのか、それは「まごころ」のみちあふれた、笑顔を興へることだ、眞實の笑顔と笑顔の交流によつて立派に宣撫の成果を擧げることが出来るだから、この婦人に一切の醫療と薬品を盡そう、そしてそのあとは「まごころ」一杯の笑顔で宣撫しよう。」

そう云つて大澤君は、藥箱を全部庭に持ち出させた、そして怪我人の頭の傷の周りの毛を切つてすつかり消毒をした、傷

す。

部下の滿洲人の宣撫官が通譯して擔いで來た人々に事情を訊ねると、それは、

「この婦人の部落が鐵道沿線から三里位、離れた部落で、大體鐵道沿線の兩側各一軒宛の地域は鐵道愛護村といふのに入つてゐるのですが、この村が三里も離れてゐたので入つてゐなかつた、その上この部落はいつも山西省と河北省を繋ぐ匪賊の通るルートになつてゐたのです。で匪賊が横行するたびに村民は米を出せ、金を出せと脅迫されてゐたのですが、その婦人もその手にかゝつたのです。夫を失つて三人の子供を抱へて暮してゐたのですが、これに匪賊が目をつけて盛んに金を要求したので。ところが本人は氣丈な女でその要求に應じなかつた、そこでとうとうその日二名ばかりの匪賊の徵發隊員が押しかけて來て口論の末、いきなり銃のやうなもので、やつつけたのです、そして女が昏倒した際に有金残らず攫つて逃走した。それから大騒ぎとなつて、村長が村民達と一緒に怪我人を擔いで宣撫班の醫療施薬をうけるべくやつて來た」

と云ふ事情でありました、通譯し終つた滿洲人のその宣撫官は、大澤君に向つて自分の意見を述べた。その意見とは、
「宣撫官にとつて醫療、施薬は最も大切なものであるから、この瀕死の重傷者にどんなに注射と薬とを興へても、

口を見てぞつとした。それでも氣を丈夫にして、傷藥りをぬつたり、注射をしたり、あらん限りの手當を施し、顔も見えない位に繃帯してしつかりとくるんでやつた。やうやく處置を終つてから怪我人の様子を見ると今にも息を引きとりそうな心細い状態である、だが大澤君は一心になつてその婦人の助かることを禱つた。一杯の葡萄酒に、自分の魂をこめて咽喉へ流してやつた。それからまもなく村長はじめ村民たちの御禮百邊とともに戸板にのせられた怪我人が歸つて行つた。

こんな事件があつて一ヶ月ばかり経つた、或る日の夕方のことだつた、一人の男に連れられた見馴れない支那婦人が大澤君を訪ねて來た、大澤君には一寸見當がつかないので、通譯に「何にしに來たか」と、聞かれますと、その支那婦人はいきなり大澤君の前に膝げよつて土下座をして、支那式に三度禮拜をする。大澤君が吃驚してゐると、その女は、

「實は私は一ヶ月程前に治療をしていただいた、お蔭で生命を救はれたあの時の者です」

と、かう云ふではありませんか、そこで大澤君は始めて相手の顔をつくづく見通した。大澤君の見忘れたのも無理のないこと、婦人はあの時の傷がすつかり治つて、頭の毛を切つて薬を塗つてやつたところも綺麗に髪を梳かして見違へる程になつてゐたのです。大澤君はあまりのうれしさにこみあげてくる涙とともに「よかつたな」と一と聲、その聲も泣いて

わたのです。

婦人も矢張り泣きながら言ふのです。

「私には三人の子供がありますが、あの時、あの儘死んでしまつたら子供はどうなつたか、それを考へると私の生命を助けていただいたのは子供三人を救つて頂いたのも同じことです、家全部が宣撫班に救はれたのです、それにはどんな御禮をしてもお禮のしようがありません」

と云つて御禮の印だからと品物をズラリと並べた、それは生きてる鶏が十三羽、それに卵の入つた籠が三籠、それを是非受取つて下さいと頼む、然し大澤君は、

「日本の宣撫班はこんな場合に君達から品物をもらふわけには行かぬ、たゞ日本と云ふ國がどんなに民衆を受する國であるかが、わかつて下されば、それでよい。この鶏も卵も、賢しい君と三人の子供の生活にとつては大切なものだ、君の感謝の精神だけを頂いておくから、この品物は持つて歸るやうに。」

と懇々と云ひ含ませてその婦人を去らせたのであつた。

それからまもなくその婦人の村に三百名位の共産匪が入つたのだが、その時は、いち早く村長等の駆けつけによつて、宣撫班から警備隊に報告され、共産匪は徹底的に撃滅されてしまつた。そして彼等共産匪が企圖してゐた鐵道爆破を未然に防ぐことが出来たのである。

この話などは宣撫班が如何に深い愛情で支那民衆を救護してゐるかを説明してゐるもので、まことに戦場の母宣撫官であります。

勇敢な宣撫官

又こんなに勇敢な宣撫官もあるのです、小川義直と云つて早稻田大學出身の宣撫官でしたが、この夏に山西の五臺山附近の掃蕩戦に従軍宣撫をしてゐたときのことでした。小川君の従いてゐた部隊の兵数は僅かに二百名位でした、大行山脈の山の中に進入つたとき約八百名の匪賊に遭遇したので、丁度谷間を挟んで大激戦が初まつた、敵は四倍からの兵力を擁してゐるのですから仲々頑強に抵抗してくるので、戦闘はいつしか持久戦に入りました、敵も味方も谷間を挟んで對峙してゐるのです、眞夏の暑いさかりですから、毎日さうやつて戦闘をしてゐるうちに水がなくなり、咽喉が乾ひてたまらない。ところが、それ程、欲しい水が、眞中の谷間には、いとも清冽に潺々として流れてゐるのです。この水を見ると死ぬ程飲みたくなるのですが、それが皮肉にもどうしても飲めない、なぜかと云ふに水を汲みに谷間に下りて行くと、忽ちバラバラつと敵弾が飛んでくるのです、敵も同じ思ひだつたのでせう、水を汲みに谷間に下りてこようとすると、身體がまる見えになるのですから、こつちからも、すぐダダ……

と撃ち出すのです、お互ひにこの有様だから、どつちからも水を汲みに行くことは出来ない。その時、小川君が、――まだ今年二十六才ですが――お互ひにこんなことをして居つては話らん、いくら戦闘中とは云へ水があるのに飲めないと言ものは人道問題だと云ふので、自分から敵陣に交渉に行かうと申出たのです。

勿論生命がけです、本人には十分の覚悟が出来てゐたのでしよう、至つて気軽な調子で「若し途中で僕がやられて仕舞つて水が汲めなかつたら勘辨してくれ、うまく行つて水が汲めたら、お慰みだ。」

と、笑ひを残して元氣に出かけて行つたのです、さうして谷間に下りて行くと、案の定敵の方から小川君目がけてダダ……と撃ちかけて來ました、その時、小川君は、

「宣撫班だア」

と、大聲で怒鳴りながら恐れずその中を突進して行つたそうです、すると敵の方でも宣撫班といふ聲を聞いて、俄かにピツタリと射撃を止めたのです。

それから小川君は單身で敵陣に乗りこんで行つて、隊長に會見を求めるとすぐ會つてくれたさうです。小川君は敵の隊長に向つて、

「お互ひに水があるのに飲めないと云ふのは馬鹿な話だから、お前の方で水を汲みに來たときには俺の方では絶對撃

たん、俺の方で水を汲みに來たときには、お前の方でも撃たんと云ふことにしてはどうか、さうしてこれからお互ひに水を汲みながら戦争をしようじゃないか、」

と、談判しました、すると敵の隊長も大いに喜こんで、

「是非さうしよう。」

と、いふことに相談がまとまつた、

「では先づ君の方で水汲みに下り給へ、俺の方では撃たないから、それで始めよう。」

と、小川君は約束の手順を極めて颯爽と引揚げて來た。小川君がこうして殺されもせず拉致もされずに、無事に歸つて來たものだから、味方の陣地では大喜び、早速、合圖の旗を振りあげると、敵の奴も五、六日飲みたくて飲みたくて我慢してゐたところだから、早速馬穴を持つて谷間に下りて來た。その次にはこつちから水汲みに出かけて、無事に汲んでくる

困苦缺乏のなかに

この小川君の態度は、宣撫官の使命を大悟した姿であり、不借身命の覺悟に徹した姿であります。

次に宣撫官がいかに困苦缺乏に堪え忍びつゝ宣撫行をなし

てゐるか云ふことに就いて申し上げますが、それは兵隊さんと同じことですが、私しの聞きました二、三の實話を

御知せ致しませう。

渡邊憲静と云ふ宣撫官の體驗ですが、二月も三月も米麦の食をとることが出来ず、メリケン粉を水に溶かして生きぬけたそうです。

又高陽の宣撫班であつた小原次郎君は、食べるものが全然なくなつて馬糞の中に混つてゐた麥を掘出して煮て食べたと云ふことであります。

それから従軍宣撫で一番多く歩いた人は、福岡駒雄と云ふ宣撫班長でした。なんでも、北京から太原まで歩いて、蒙古の包頭に出て、それから天津に入つて、山西の濟南の方に歩いて臨海線の方に出るまで、ずうと歩いた。しかもその従軍宣撫は部隊に従って歩くのですから、宣撫官は、ラチオとか著音器とか、その他種々の資材をもつて居るのですから、とても大変です。最初牛に引かせますが、牛が駄目になると驢馬に引かせる、それが駄目になると、最後は一輪車に乗せて自分で引く、その繩を肩にかけて索ばつて行くのですが、部隊はどんどん行く、遅れないやうに従って行かねばならないのですが、雨が降つて路がぬかり、雪が降つて氷が張つたりすると、もう靴は破れて足が出てしまふ、又肩の繩がしつかり喰ひこんで、一寸位肉が凹んで骨が出てくると云ふのです。

こんなに苦勞をして宣撫使命を遂行してゐる宣撫官なので

ないのである、然も手垢つたあとの水を丁寧に澄まして置く、何んと美はしき心やりではないか。

吾々も今日興亞の業に就くものは、この蒙古人が「泉の掬」を守る精神に學んで、次に來る故人のために、次に來る吾等の弟、そして子供達のために吾々の仕事は立派に成し遂げて置かなければならぬ、次に來る國民が、吾々先輩の遺して行つた清明なそして尊き泉を感謝して咽喉するときこそ汚濁せざる日支關係が、永久にこの泉の如く清澄に保たれてゆくからである。」

總班長はかくの如き精神で、宣撫の業にあつて居られます。部下である二千有餘の宣撫官も、八坂瓊曲玉の大御心を體して、「まこと」一つを武器とし、戰場に母たるの大愛情をもつて戰禍に戦き、さ迷ふ無辜の民衆を救護して居るのであります。

武器なき戦士

最近、八木沼先生の作られた宣撫官の歌の一節に、

碧空に照る陽は 一つだけ

あゝひるがへる ひるがへる

国旗の下に 吾死なむ

屍こえて 乗り除えて

君、大陸の 柱たれ



あります、何んと云ふ尊くも有難い、御働きでありませんか。

八木沼總班長は語る

北支宣撫總班長八木沼先生は斯様に申されて居りました、「無智蒙昧の民と云はれてゐる蒙古族にも、大いに教へられるところがある、彼等が、成吉思汗の教書にある「泉の掬」を尊奉してゐる姿のなかに、吾等は學ばなければならぬものがある。それは、かの蒙古は一木一草だにならぬものがある。その海と云つたところである、その曠野を烈々百度を超ゆる眞夏の日に放する蒙古人にとつて、水がどんなに尊く、そして有難いものか、然し、水を湛ゑる泉は十里を放して漸く一つを見出すことが出来るか出来ないかである。その泉を發見したときの喜びはたとへる言葉もない程だらう、焼けたゞれてゐる自分の咽喉をうるほし、火のやうな呼吸を吐いてる駱駝に飲ひ、蘇生の想ひに立ち還へる、然し彼等は、如何にその泉が、僅かの水量しか保つてゐない泉であつても、決して全部を飲みほすと云ふことはしない、そして決して飲みあとを濁すなど、と云ふことはしない。それは成吉思汗の教書に書かれてゐる「次に來る故人のために泉を清く保て」を固く守つてゐるからである、次に來る故人のためにたとへ濁がそれ以上の水を欲しても、決して飲み乾すことをし

武器なき戦士 宣撫官

と、云ふのが御座います。まことに宣撫官こそは、皇道、即ち碧空に照る一つなる太陽の光りを宣布するために「まこと」一つを武器として戰つてゐるのであります。そして國旗の下に、笑つて死んでいつた宣撫官が澤山居るのであります。それこそ尊い大陸の柱でありまして、この柱が幾百幾千となく建てられて、はじめて東亞新秩序の建設がなるので御座います。

私達は、皇軍を尊敬し感謝する氣持とともに宣撫官に對し、心からなる尊敬と感謝を捧げようではありませんか。

時代對應の教化

磯部滿事

五八

本多大僧正、昭和五年の夏八月、御静養の地から、施本用として九月頃に適當のものこれ／＼を發刊しやうではないか、而して表題は「生ける佛教」と致したいとの仰があつた。それがあつた事情の爲め中止され洵に残念な次第と思ひ、先年更に出版しやうと試みたこともあつたが、時未だ到らざるか、其儘となつて大切に保管されてゐた。

偶々大事變の勃發につれ思想上にもある變轉の相を見逃すことは出来なくなつた。それが年を重ねると共に益々深刻になり、このまゝ打捨ておけない想がする。此時にこそ日蓮門下は奮起せねばならぬ。その日蓮門下に於て最も自由の立場にある吾等の起つべきではあるまいか。本多上人は其學風として『時代對應の教化』を示教されて居り、日蓮聖人は『時を知るを大法師となす』と仰せられた。又『速かに實業の一善に歸せよ、然れば則ち三界は皆佛國なり、佛國其れ衰へんや。十方悉く實土なり、實土何ぞ壞れんや。國に衰微なく、土に破壊ならんば身は是れ安全にして、心は是れ禪定ならん』と立正安國論に結ばれて居る。今の時須らく人々に根柢ある道徳、深淵なる哲學、純眞なる宗教を興へることが最も緊急の大事と信する者である。體系的精神文化を有たぬ國家は、いかに軍備、經濟の充實に誇つて居ても、やがてそれは失敗に畢るべきものである。『心かひなれば多くの能は無用なり』併し又腕の力と、心の力とはどちらにも偏すべからざるもの眞の人格者は身心俱に力の人である。普通世間でいふお人好しと謂はるゝ人が必ずしも人格者といふべきではない。人格者とは完全なる人を指すのであつて、其のお手本は、お釋迦様を拜する

がよい。釋尊はその御智慧に於ても、其御力用に於ても、其御慈悲に於ても、總ての點に於て超出し、微塵も批難せるべき所はなかつたといふ事は史實の上に明瞭である。然るに徳川時代から、釋尊を輕視し、明治に到つて佛教を排斥したことは、我國民思想上の一大損失で三省すべきである。坊さんの態度を見て佛教を蔑んだり、方便の教か眞實の教かを辨へず單に其一句一偈を捉へて全體を斷ずることは學者として慚ぶべきことである。宗教の本質を辨へないで宗教を論議せんとする人が世間には相當ある、特に知識階級と稱する仲間にも多い。又一種の形式に執はれて、それを直ちに本質に及ぼさんとする者も尠くない。けれども今の場合そんな評論を逞ふべきでなく、卒直に先哲の言論を諷諭しお互の信念を堅め人格改造に進むべき焦眉の急に迫まれて居る。そこに警戒すべきは如何に碩學高德の師を擇ぶべきか々大事であり、『善知識は全修行』の金誨もあり、『三年學ぶより三年師を擇ぶに如かず』とも訓へられてゐるから其の選擇に對して大なる苦心を要するであらう。爰に私は卒直に近代の教傑大僧正本多日生上人を推す者である。仰げば仰ぐ程巨きい、近づけば近く程慕はしい、本多上人、心ある方々は必ず共鳴下さるであらう。この本多上人の學風こそ刻下、國民思想の大燈明であると確信する。殊に曩に自ら施本用として出版されんとしたことを憶ふと矢も楯もたまらぬ。幸にも同感の田中、中村、池田等の諸氏熱誠なる精進にお互力を得て主伴となり、日生上人等身の著書並に數多の原稿を精選又精選、先づ其第一巻として『黎明の原理』と題し刊行するに到つた。こゝに來る迄には妹尾、中山等の同志にも大きな清援に預かつた。

現代人は宗教の信仰を無用視しつゝ、猶且つ靈魂不滅を信せんともがいて居る。因果を撥無して獨り濡手で泡を空想して居る。神社といへば其祭神の如何を知らず盲從する。道義を没して法律の裏を探して居る。猶ほ恐るべきは少青年の浪費放逸の増加である。中産階級の没落である。婦人の家を外への發展である。女子の無禮と無羞である。指導者の理窟に巧で而かも腹のないことである。畢竟するに我國民の美點長所が年月と共に失はれつゝあることであ

五九

る。上層と雖も據所なく、根なし草の水に漂へる様なことは何に基因するか、是れ宗教を持たないからである、釋尊の御教から離れたからである、自己本有の佛性の深き眠りに墮ちて居る證據である。

眞に國家を愛する士女は、宜しく明教を仰ぎ之に服すべきである。其の順序として先づ本多上人の『黎明の原理』新刊を手にされんことをお奨めする。『黎明』とは我神淵日出づるの國に源を發しやがて全世界に樹立せらるべき新しい秩序の黎明をいふのである。秩序とは申す迄もなく上に 有徳の聖者を戴き、下大衆がこれを崇敬渴仰し宗朝する處に存するものである。斯の道行はれて一天四海は皆悉く安穩靜謐である、經王法華は實にこの尊敬すべき對象の實在を宗教的に、哲學的に、且つ道徳的に論證して、智あらん者歎んでこれに心伏し、歸依する其處に此の現實の世界をして理想化し淨土化せしめんと提唱せる寶典である。これ又我が國が三千年來實踐し來つた事實なんである。この兩者の冥合に隨喜の涙滲然と流して弘教されたのが日蓮聖人である。私共はこの尊い事實を世界的に、宗教的に完成せしむることの爲めに、本多上人の活釋を擧げてこの『原理』を世に送る次第である。

只今一月二十二日の新聞に、我野島崎沖に於て英艦が、客船淺間丸を臨檢して船客たる獨逸人二十一名を拉致した記事を見て強い感激を覺へた。若しこれが我國内に於て、敵國人であるからと、交戦國の側から引渡しを要求された場合に、ハイ左様でござるか素直に渡すべきかを借問する。現在我國内には未だそんな事なく、吳越同舟である。

海上に於てはそれが領海であらうが、なからうが船舶は其國の延長である。然らば客船淺間丸と名けても、歸する處我大日本帝國の一部分なんである。この併立國へ侵入し家探しをして、自分の必要な品を持ち逃げしてもよいものか、國際法は兎も角として、そんな事が道徳上許さるべきものか、宗教的には一層嚴誨される所である。この最近の事實に徴しても私は日本人のみならず、世界の人々にも、釋尊の明教を興へたい、その段階として『黎明の原理』を廣く精覽して戴きたいものである。

(記 事)

本部 團報

元朝會 恒例に依り殊に本年は光輝ある紀元二千六百年を迎へ、且つ第五回興亞奉公日でもあり、又毎週月曜曉天の勤行日でもあり種々有意義の元旦に際し、朝六時先づ田中理事兄弟連にて千葉津田沼より先陣を着けられ、續いて同心會員、立正青年團員等階上忽ち超滿員のもとに、恭しく奉祝元朝會慶修、終りて磯部田中兩理事、池田會長の感激深き法話ありて後少憩、八時過約六十名は一隊を編成して宮城に向ひ、一同最敬禮の中に 皇道繁榮 實祚萬歳 皇威宣揚の悃禱を捧げ、聖壽萬歳を和唱して九時散會。

立正賽修行會 一月六日の寒の入りから三十日間、毎朝六時三十分修法、法華經序品より一同訓讀、唱題後法話ありて昨年同様有志へ白粥の御供養する。殊に本年は立正青年團員數十名の参加あつて座席狹隘を告げ、火の氣ない處に全身の熱禱を捧げての勤行に自ら發汗を覺え、莊嚴極りなく、この祈りに感應非らざるはない。初日は特に 本多上人の遺稿を整理し、時代對應の教化書たらしむべき「黎明の原理」稿本を御寶前に供へて其成滿を祈願した。

新年國講會 例年の通り正月七日、本部講堂に於てストーブ

も發された緊張寒團氣の中に、午後二時より皇紀奉祝國講會を営んだ。滿堂至誠の法味を捧げて後、磯部常任理事の挨拶あつて直ちに、岩野少將から別項の如き所感を述べられ、續いて小林先生の本年に於ける吾人の覺悟を述べられ、次に河合勝明氏の特に房州から参加熱辯を振はれた。此外にも三四の方々から是非御感想を拜聴致したいと思つたが、遠く横濱や浦和邊からも隨喜参列されて居り、又御婦人達の時間の關係上、山口智光師の閉會の唱題に先づ散會として、有志は會議室に懇談七時過に名残のお別れした。

因に當日上田理事長並に佐藤卓藏中將は、御風氣の爲めに御用心され、本郷日常氏は左の即詠を示された。

建國こゝに二千六百年

我等の頭上に光輝燦たり。

新東亞建設の雄音高く

國の内外に響き渡れり。

猶立正青年團よりお菓子のお供養あつたことを爰に厚く感謝合掌する。

御書講座 日蓮聖人、撰時鈔の講義が、正月九日の火曜日晚から、小林先生に依つて始められて居る。酷寒中且つ物資窮乏の際、一層お互の精神充實を期し、法悦歡喜の日常に精造致したいものであります。

第六章 東洋思想の大共通點

細目略

第七章 日蓮主義の國體觀

細目略

第八章 佛教徒の生活理想

細目略

本書推薦者 (いろは順)

井村日威氏	井上清純氏	井上一次氏	岩野直英氏
林 頼三郎氏	本多熊太郎氏	小笠原長生氏	龜岡豊二氏
高島平三郎氏	野澤悌吾氏	山田三良氏	八木沼丈夫氏
山川智應氏	松井 茂氏	小林一郎氏	姉崎正治氏
酒井日慎氏	笹川日堂氏	佐藤鐵太郎氏	佐藤 卓藏氏
佐藤梅太郎氏	木村日保氏	清浦奎吾氏	三吉 顯隆氏
三原敏夫氏	清水龍山氏	柴田一能氏	下村壽一氏
四王天延孝氏	釋 眞誓氏	望月日謙氏	以下略

發行所

財團法統 一團

本多日生上人著書特價提供

聖 語 錄	改 版	特 價	金壹圓八拾錢
法華經要義	賜天覽	送料共	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓		全	金壹圓五拾錢
日蓮主義精要		全	金貳圓九拾錢
真理の基礎に樹つ佛教の信仰		全	金拾五錢
法華經要品		全	金五拾錢
日生上人レコード(四面)		全	金參圓廿五錢
本尊意識に就て		全	金貳拾錢
釋尊の八相成道		全	金貳拾錢
法華經の心髓		全	金壹圓五拾錢
總部諸事編輯		特 價	金壹圓七拾錢
本多日生上人		送料共	金拾錢
勳行作法		全	金壹圓
佛教の心髓		全	金壹圓
河合夢明著		送料共	金壹圓
皇道と日蓮主義		送料共	金壹圓

東京市小石川區音羽町六ノ十七

財團法統 出版部

〒東京九四二〇番

統一定價
一冊 金貳拾錢 送料壹錢
半ヶ年 金壹圓貳拾錢
一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

注意
▲御申込へ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
▲御居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御
通知ノ事

昭和十五年一月二十八日印刷納本
昭和十五年二月一日發行

(第五百三十九號)

不許複製

編輯部 滿事
發行所 東京市小石川區音羽町六ノ十七
印刷所 東京市四谷區内藤町一
東京市小石川區音羽町八ノ十一
野島好文堂印刷所
電話牛込六九六番

發行所 財團法統 一團

東京市小石川區音羽町六ノ十七
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番

次 目

聖訓摘要	本多日生
開目鈔講話(第三十三講)	小林一郎
如來行としての皇道理想	河合陟明
歐米より歸りて	長谷川正道
太鼓を叩け	藤浪剛一
寒行會(和歌)	金城唯温
記事	
○本部國報	
○羅府教信	
○北京支部報	
○團費誌料寄附金及維持費領收	
大藏經要義續篇(其十九)	本多日生

第四十五年三月號

統

法人團
統
一團發行